



【凡例】

**会社名**(または刻印・煉瓦の仮称)

(印影)

(大阪窯業刻印を基準にしたおよその倍率)

A:工場所在地  
B:工場存続期間  
C:当該刻印使用時期  
D:刻印採取物件  
E:該物件所在地  
F:該物件建造年  
G:マッチング根拠  
H:特記事項  
※印影文字は似たフォントで代用したものがある。 ※出典略記は以下の通り。煉瓦史:水野信太郎『日本煉瓦史の研究』、集成:同『国内煉瓦刻印集成』(中部産業遺産研究会「産業遺産研究」第8号)、『年報』:泉南市埋蔵文化財センター年報H22版

**大阪府**

**泉布観使用煉瓦**

**YEGAWA** ×0.6

D:泉布観  
E:大阪府大阪市北区天満橋1-1-1  
F:明治3年(1870)~4年  
G:印影、出土状況  
H:厚50mmに満たない薄い煉瓦。英人ウォートルスが鳴野に登り窯を築き、江川某に焼かせたという記録があり、それを裏付ける煉瓦刻印とされている。大阪府蔵。

**泉布観使用煉瓦**

*Sugimoto* ×0.6

D:泉布観  
E:大阪府大阪市北区天満橋1-1-1  
F:明治3年(1870)~4年  
G:印影、出土状況  
H:江川某煉瓦と同じサイズで、中央に筆記体で“(S)ugimoto”と刻印がある。ウォートルスが使役した瓦屋の一人か。大阪府蔵。

**阪府授産所**

府阪授産所

A:難波新地六番町  
B:明治5年(1872)~10年  
D:旧大阪府庁舎  
E:大阪市西区江之子島2-2-11  
F:明治7年(1874)  
G:印影、文献(『大阪府庁舎発掘調査報告書』)  
H:旧大阪府庁舎(江之子島府庁舎)跡で出土。明治5年に大阪府が設けた官営授産所(後の第二勸業場)で製造されたものとされている。大阪府教育委員会蔵。

**阪府授産所**

HANFU, JUSANSIO.

(データ同左)  
H:旧大阪府庁舎発掘現場で和文刻印とともに出土。英文で阪府授産所とある。阪府授産所はさまざまな職業とともに煉瓦製造も教授し、同業の普及に功績があった。施設と敷地は明治11年に藤田組に払い下げられ同15年頃まで煉瓦を製造した。

**若井煉瓦**

若

A:大阪市堺区神明町西2  
B:明治21年(1888)~明治28年頃  
D:民家前転石  
E:堺市宿屋町西  
G:印影  
H:「若」を井桁で囲む。同様の刻印は神戸外国人居留地発掘跡や煉瓦壁、兵庫県洲本市の由良砲台(明治22年~建造)等で見つかっている。ハンター邸の報告書にも記載あり。

**若井煉瓦**

MANUFACTURED BY 若井造製 SAKA ×0.75

A:大阪市堺区神明町西2  
B:明治21年(1888)~明治28年頃  
D:神戸外国人居留地境界壁  
E:兵庫県神戸市中央区  
G:印影  
H:神戸外国人居留地の煉瓦壁の上面に露出。明治20年代初頭、堺区には多数の小工場が存在したが、中でも同社は比較的大きな工場であった。英文表記は海外輸出を狙ったアピールか。

**成金商社**

JAPANOSAKA 成金商社製造 AKAIKU ×0.75

A:大阪府堺区  
C:明治20年(1878)9月~明治21年9月若井煉瓦工場  
D:兵庫県神戸市中央区旧居留地境界壁  
G:印影、文献  
H:若井煉瓦の前身となる会社。これと若井煉瓦の刻印が共使いされている旧居留地の境界壁は、その端境期に建設されたものであることがわかる。

**青山商会(青山工場)**

山

A:堺区少林寺町西4町(M22.3頃分工場:奈良県広瀬郡大輪田村)  
B:明治19年(1886)8月青山工場~明治22頃  
D:奈良駅旧転車台  
G:社章  
H:大阪毎日新聞明治22年2月2日号に青山工場→青山商会の改名広告がありこの社章が掲げられている。同型刻印は奈良駅旧転車台より採集例あり。また同新聞3月3日号には大阪鉄道に供給する分工場を設けた旨広告されている。

**川口雑居地煉瓦壁刻印**

○

D:川口雑居地(富島天主堂塀?)  
E:大阪市西区川口3-5-31  
F:明治元年(1867)~(富島天主堂は明治12年)  
H:直径2.5cm弱の円形の刻印。川口雑居地・富島天主堂跡の区画に残る煉瓦壁で見られる。副印・符丁なし。この壁は同建物の一部であった可能性がある。

**淀川橋梁橋台“○”刻印**

○

D:JR大阪環状線旧淀川橋梁橋台(桜ノ宮駅西北側)  
E:大阪市都島区中野町4-20  
F:明治34年(1901)頃  
H:関西鉄道が建設した淀川橋梁橋台に見られる刻印。同型刻印は各所で見られるが、該橋台のこの煉瓦には破損した岸和田煉瓦印判で押されたと思われる“ト”型の刻印もある。岸和田煉瓦で製造され、打刻時に判が破損したために仮採用した印である可能性がある(右ワッシャー印参照)。

**淀川橋梁橋台“○”刻印**

○

D~F:同左  
H:淀川橋梁橋台に見られる○刻印のバリエーション。釘の跡が2箇所に認められ、ワッシャーか何かを流用して急務えした印であることがわかる。形状は違うが前掲印と同じ会社のものと思われる。

**淀川橋梁橋台“上二”刻印**

上二

D~F:同左  
H:淀川橋梁橋台に見られる刻印。「上二」「上三」の二種類がある。該当会社不明。

**旭商社→旭(株)**

六ツ

A:大阪府堺市柳ノ町西3  
B:明治19年(1886)→同37年頃  
G:刻印使用状況  
H:堺市街で操業した老舗工場。明治21年10月には月産25万余個、33年に大阪府煉瓦製造業組合が設立された時も筆頭発起人になるなど当時を代表する大工場であった。納入記録のある宮崎県山伏屋隧道で同系統の漢数字印を検出。明治30年竣工の深山第一砲台では漢数字印・カナ印が共使いになっており、この頃に変更があったものとみられる。

**大阪窯業株式会社**

○

A:大阪府堺市堺区(旧南附洲新田)他  
B:明治15年(1882)1月~  
G:文献  
H:明治12年設立の硫酸瓶製造会社から煉瓦製造業に転身、明治末には府下最大の煉瓦製造業者に成長。カナ+「改」の副印付(岡町住宅地)、中央に英数字入り(阪急三国駅前路傍)、台形の副印つき(堺市工場跡付近)などのバリエーションがある。

**堺煉瓦株式会社**

六

A:堺市吾妻橋通2丁目  
B:明治26年(1893)7月~大正9年  
G:文献  
H:共立煉瓦会社(明治22年7月~)を経て設立。明治20年代~30年代には府下最大の煉瓦工場だった。中央にかなで符丁が入っているもの(JR東海道線旧狼川トンネル:明治33年竣工、JR桜井線神武里道高架橋:明治26年竣工等)に見られる。漢数字のもの(北陸本線山中トンネル近傍転石)、より細い5本線のものなどがある。

**岸和田煉瓦株式会社**

×

A:岸和田市並松町  
B:明治26年(1893)頃~大正11年(1922)岸和田煉瓦綿業株式会社~昭和63(1988)  
D:府下各地  
H:岸和田藩士の授産工場を起原とする第一煉瓦製造会社(明治21年創業)から社名変更。昭和63年まで営業を続け、刻印煉瓦も広範囲に渡って分布している。機械成形に打刻、「イ」「ウ」「井」等の副印を有する、などバリエーションがある。

**岸和田煉瓦(“岸×泉”)**

岸×泉 ×0.75

D:現イズミヤ和歌山店駐車場壁  
E:和歌山市新生町7  
H:岸煉刻印のバリエーション。該物件には左掲の×刻印、日本煉瓦刻印と共使いされている。山口県下関市考古館付属屋(旧下関英国領事館:明治39年竣工)でも同じ刻印が見つかっている(『集成』)。また江之子島府庁跡からは“標×商”刻印が出土。同社の商標取得は明治36年5月8日(『日本登録商標大全上巻』)なのでそれ以降使用された刻印と考えられる。後補に用いられた煉瓦か。

**丹治煉瓦工場**

二

A:泉南郡触松村(堺市堺区)  
B:明治3年(1870)~大正元年丹治煉瓦合名会社→11年7月11日清算→12年4月丹治煉瓦合資会社→15年9月12日解散  
C:明治期? D:工場事務所他  
H:府下最古の私設煉瓦製造所の一つ。明治末~大正期には府下六大会社の一角をなした。■記号のような刻印は京阪神各所で見られ、山陰線竹野川橋梁旧橋台や香美町釜屋三柱神社壁等(明治末)にも検出。丹治氏個人工場時代の使用印か。

**丹治煉瓦合名会社**

○

A:丹治煉瓦合名会社?  
C:大正元年~11年  
D:工場事務所他  
E:堺市堺区永代町1-1-13  
G:文献 G:印影  
H:大正2年刊『帝国商工信用録7版』等の商工録には左掲の記号が掲げられているが、現存する工場事務所建屋にはこのマークが掲げられ、同マークの刻印煉瓦も使われる。『大阪府実業参考録』(T13)にも社章記載あり。会社組織化後の使用印か。

**“二”刻印**

二

D:堺市側溝、空地転石他  
E:堺市堺区賑町2-2  
H:『帝国商工信用録』掲載の丹治煉瓦“合資”会社の社章を左右反転・右転置したもの。縦書きの漢数字が添えられていることが多い。これも丹治工場の使用印とみられる(富田林市万里春酒造脇の敷石では左ズレ刻印と右ズレ刻印が共使いされている)。

**芝山トンネル煉瓦英字刻印**

R H


D:JR関西本線(旧・大阪鉄道)芝山トンネル笠石  
E:大阪府柏原市国分市場1  
F:明治23年(1890)  
H:1cm角のアルファベットの刻印。初代亀の瀬トンネル、奈良駅転車台など大阪鉄道に関連する構造物で集中的に類似刻印が見つかっている。大阪城大手前配水池(明治28年)周辺で同系統の「M」、桜ノ宮毛馬公園干潟で「R」を採取。あるいは河合町大輪田に計画されていた青山商会分工場と関連?

**(推定)堺附洲煉瓦**

ツキス

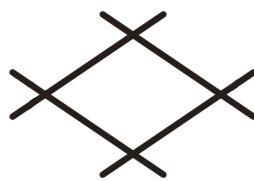
A:堺市中附洲新田(堺市大浜通)  
B:明治22年(1889)~明治30年頃  
D:空地転石  
E:堺市堺区賑町3-2  
G:印影  
H:高石市高師浜、大阪市住吉区路傍、神戸市異人館街空き地などで見つかっている。堺附洲煉瓦の刻印か。同社の社長・野田吉兵衛は後に日本煉瓦の社長に就任しており、日本煉瓦の前身と推測される。工場跡地に大阪窯業が進出し堺工場を建設?

**日本煉瓦株式会社**




A: 堺市堺区(旧船松村)  
B: 明治30年(1897)～昭和22年(1947)G: 文献  
H: 明治後期～昭和期を通して大阪窯業に継ぐ規模を誇った大工場。『大日本商工録』所収の社章と同じ刻印が工場跡地の煉瓦壁で見られるが、むしろ英数字や漢数字を内包するものをよく見る。作業者を区別する内部符丁か？

**貝塚煉瓦株式会社**



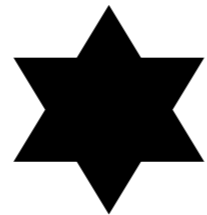
A: 大阪府貝塚市  
B: 明治27年(1894)～明治40年  
D: 南海和歌山線宇治拱橋  
E: 和歌山県和歌山市五筋目  
F: 明治36年(1903)頃  
G: 『日本工業要鑑』第2版巻末広告  
H: 南海和歌山線宇治拱橋、湊川隧道(明治34年竣工)などで見られるほか、貝塚市市街地にも多数分布。神戸市でも採取例あり。明治40年に大阪窯業に吸収合併・消滅したため、単独で年代指標に利用できる。

**大津市大萱転石**




D: 大津市大萱3丁目路傍  
H: 井桁菱の中に「力」の文字。厚77mm超の煉瓦に打刻。大阪窯業貝塚工場(旧貝塚煉瓦工場)の近傍で井桁の脇に「力」の文字を添えたものが見つかっており、この刻印も貝塚煉瓦のものと同様と推測される。明治36年第5回国内勲業博覧会では堺煉瓦と貝塚煉瓦が「三吋型」煉瓦を出品している。該煉瓦も3インチ=76.4mmを意識したもの(東海道線大津～米原間建設に供給したもの)か。

**津守煉瓦**




A: 大阪府大阪市西成郡津守村(大阪府西成区津守)  
B: 明治30年(1897)5月～大正10年頃大阪煉瓦を買収?→大正14年頃機能移転(狭山煉瓦工場)  
H: 大阪～和歌山にかけて広範囲に分布。『日本工業要鑑 第4版』巻末に広告がありこのマークを社章に掲げている。同工場跡地周辺でも採取例があるほか、大正期に買収した?大阪煉瓦の跡地(堺市東区南野田・狭山煉瓦工場)でも小型の六稜星刻印の焼損煉瓦が検出されている。

**(推) 泉州煉瓦製造所**




A: 泉北郡尾根村  
B: 大正5年(1916)～10年  
D: 堺市中区津久尾町1溝縁石ほか  
G: 分布状況他  
H: 大阪府下南部(特に堺市中区・西区辺)でよく見られる刻印。和泉市旧府神社脇の煉瓦壁に日本煉瓦・堺煉瓦と共使われている例がある。泉州煉瓦製造所所主は土木請負業・橋本組の支配人であった高石覚文。橋本組の自社工場として稼働し、そのために比較的広範囲で検出されているようである(橋本組屋号はは〇料)。

**塔本煉瓦工場**



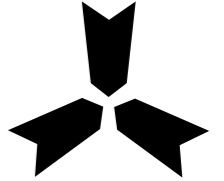
A: 泉北郡八田荘村大字ヲチノ池(出張所: 堺市大浜通り砂房内)  
B: 大正5年(1916)～昭和14年  
H: T13刊『大阪府実業参考録』に塔本煉瓦工場の商号として掲げられた屋号。該誌掲載時の所主は塔本商会・塔本常治、工場所在地は上記。煉瓦刻印としては未検出。中区八田寺町13-1近隣の畑に焼損煉瓦が多数転じており、ここが工場跡とみられるが、いずれも無刻印であった。煉瓦への打刻はしなかったか。

**大阪煉瓦**



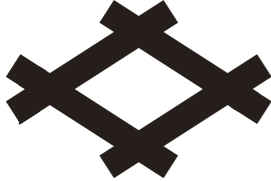
A: 南河内郡狭山村池尻(大阪狭山市狭山)  
B: 大正6年(1917)10月～昭和5年(1930)1月狭山煉瓦～7年狭山煉瓦製造所～14年頃  
D: 工場跡地  
G: 分布状況  
H: 「大」の字を意匠化したもの。工場所在地で刻印入り焼損煉瓦を採取。同社は後に津守煉瓦関係者の所有となり六稜星刻印の煉瓦を製造した模様(その焼損煉瓦も同じ場所で見つかっている)。

**和泉煉瓦株式会社(初代)**



A: 大阪府泉南郡沼野村(岸和田市)  
B: 明治38年4月～40年大阪窯業に合併(大阪窯業岸和田工場へ)  
H: 矢筈を三つ組み合わせた刻印。『日本工業要鑑 第2版』巻末に広告があり和泉煉瓦の社章と知れる。大阪窯業貝塚工場跡地、熊取町中家住宅、岸和田市内紀州街道沿い等で見つかっている。中家住宅では大阪窯業舗装煉瓦(大正12年製)と共使われているが、合併後も残っていた在庫とともに転用されたことがわかる。


**和泉煉瓦株式会社(二代目)**



A: 大阪府泉北郡向井町(堺市堺区)  
B: 大正6年2月～大正11年大阪窯業に合併  
D: 阪急岡町住宅地排水溝他  
E: 大阪府豊中市岡町北2  
F: 明治45年～  
G: 文献、分布状況  
H: 初代とは無縁。貝塚煉瓦の刻印に似るが、幅4cmほどの大振りな刻印で、線もより太い。『大日本商工録 第二版』に和泉煉瓦株式会社の社章として記載がある。岡町住宅地では後年拡張された地域で見られる。

**樽井煉瓦(化粧煉瓦)**


**イルタ TARUI.GO**



A: 大阪府泉南郡樽井村(泉南市樽井7-32)  
B: 明治37年(1904)～昭和20年(1945)  
D: 工場跡転石  
G: 印影、分布状況  
H: 樽井村宇浜地の樽井煉瓦工場の製品。平を凹めて裏表に「タルイ」「TARUI.GO」を陽刻(GO=合資?)。採取したサンプルは長手に釉薬がけが施されており、化粧煉瓦として作られたものであった。

**樽井煉瓦(化粧煉瓦)**


TRADE MARK  
**TARUILENGA**



D: 鳴滝民家軒先縁石  
E: 泉南市鳴滝2-10  
G: 印影、分布状況  
H: 平全面に陰刻+全体に釉薬掛けされた化粧煉瓦。素焼きの状態の煉瓦が工場跡地で見つかっている(『年報』)。同社はこのような化粧煉瓦を得意としたらしく、工場跡に残る民家にも色鮮やかな化粧煉瓦が使われている。

**(推定) 増田煉瓦**

TRADE MARK  
**MASUDARENGA**



A: 大阪府中河内郡瓜破村東瓜破2049  
B: 大正6年(1917)→S4頃増田窯業所(土管も製造)→S10煉瓦製造専業～戦時中廃業?  
E: 大阪府堺区南安井町5丁、大阪府平野区平野本町  
G: 印影  
H: 樽井煉瓦の刻印に酷似した大型刻印。トレードマークは矢代氏樽井煉瓦のマークを切断したもので、下段表記も強く類似(サイズも同じ)。型が流用された可能性が高いが、その経緯は不明。

**樽井煉瓦(化粧煉瓦)**


TRADE MARK  
**イルタ**  
所造製瓦煉



A: 工場跡近くの空き家で採取。一連の樽井の化粧煉瓦と同様のプレス成形の煉瓦(長手に釉薬)で、平に「タルイ/煉瓦製造所」、「TRADE MARK」と三つ鱗が陽刻される。三つ鱗は大正10年に明治屋によって商標登録されており(『日本登録商標大全』)、その特許が切れた昭和16年から樽井煉瓦廃業の昭和20年までの間に作られたものと推測される。サイズは「TALUI LENGUA」と同じ。


**樽井煉瓦**

**タニ**



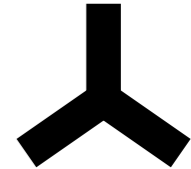
D: 樽井煉瓦工場跡  
E: 大阪府泉南市樽井7-32  
G: 印影、分布状況  
H: 工場跡の住宅に敷石として使われている普通煉瓦の刻印。「タ」は樽井煉瓦のタ、下は内部符丁と思われ、「一」「二」の二種類が確認できる。

**樽井煉瓦(異形煉瓦)**




D: 工場跡未使用煉瓦  
E: 大阪府泉南市樽井7-32  
G: 印影  
H: 角の一つを丸めた異形煉瓦(恐らくプレス成形と思われる端整な煉瓦)に打刻。「X」は同社の社章で(『大日本商工録』)、この記号が単独で押された煉瓦だけでなく屋根瓦も見つかっている。この社章は矢代氏時代のものか？

**樽井煉瓦製造所**



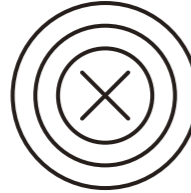
D: 神戸市北区唐櫃台転石  
H: 大阪毎日新聞明治30年1月8日号8面に樽井煉瓦製造所の開業広告があり、このマークが掲げられている。樽井村には2つの煉瓦工場があったらしく現・府立りんくう翔南高校の位置にあったのが最初の工場でありこの社章を使ったと考えられる。神戸市北区唐櫃台で採取された添印「ウ」つきの刻印が該当するか。この煉瓦刻印は小口前で打刻されており、長手前で打刻されたものが多い他工場の三本線刻印とは系統を異にする。

**“耳付二重丸”刻印**




D: 樽井煉瓦工場跡転石・堺  
E: 大阪府泉南市樽井7-32  
H: 樽井煉瓦工場跡地で見つかっているが、おそらく他社の刻印と思われる。泉南市域には他に伊藤煉瓦(大字尾崎)、岡田煉瓦(大字岡田浦)、三和煉瓦(元泉州煉瓦・大字鳴尾)など複数の煉瓦工場が存在した。京都府木津川市上拍市街地では角丸の異形煉瓦に押されたものが採取されている。

**“三重丸+X”刻印**




D: 土堀崩落箇所(転石)、路傍転石  
E: 大阪府泉南市鳴滝2-8ほか  
H: 泉南地域や和歌山県下で時おり見られる刻印。鳴滝には壊れた素地煉瓦を使った塗り込め土堀が散見され、そのような土堀でこの刻印を検出する。尾崎にはJISサイズの同刻印煉瓦がある。以上の状況から大正期に鳴尾で操業していた紀泉煉瓦の刻印と推定される(和歌山市には一時期紀泉煉瓦の出張所があった。和歌山県下の分布はそれに依るか)。

**“//”刻印**




D: 豊中市小曾根民家花壇縁石 E: 豊中市小曾根2-12 H: 平中央に押された二本の斜線。同市の岡町住宅地でも見られる。同種の刻印は兵庫県伊丹市大鹿の伊丹煉瓦所在地周辺でも採取。また一本線の斜線もあり(特に小曾根では2者が共使われているケースがある)。

**“□+英数字”刻印**




D: 堺市空地転石  
E: 堺市堺区綾之町西3-1  
H: □+数字。堺の旧市街北部でよく見られ(丹治煉瓦事務所周辺で特に濃厚で、同工場の丸丹刻印と共使いになっているものもある)、数字は1、7、8などのバリエーションが確認されている。またこの印に小さな三角形の刻印が添えられていることが多い。これも丹治煉瓦の使用印か。

**“○5”刻印**



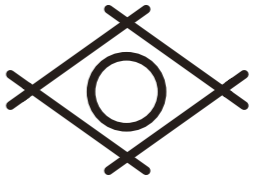
D: 四天王寺南門脇壁(亡失)  
E: 大阪市天王寺区四天王寺1  
H: 径約2cmの丸数字の5。数字が内部符丁でなければ、西成郡川北村にあった五成社の刻印か。同社は耐火煉瓦を専業としたようだが、『大阪府統計書』明治26年版以前では製造品目が「煉瓦」と書かれている。あるいは右掲の“○+カナ”刻印と関連があるか。該物件は平成24年頃に撤去され亡失した。

**“○又”刻印**



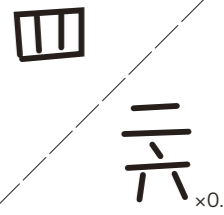
D: 豊中市小曾根転石  
E: 豊中市小曾根2-16  
H: 径約2cmの円の中に「又」。城東区新喜多の貞徳舎(明治22年より現地で操業を続ける耐火物製造所)の煉瓦壁に「○ト」が見られ、内部符丁である可能性があるが、「○」自体が特定の会社を指している可能性も捨て切れない(淀川橋梁参照)。なお「○ト」は愛媛県三津浜煉瓦跡地でも見つかっている。

**“井桁+丸”刻印**



D: 住居跡転石  
E: 大阪府豊中市原元町2他  
H: 住居跡の更地にて。井桁の中央に○の刻印。大阪市此花区西九条の民家の軒先転石に同じ刻印が見られたが、現時点ではこの2カ所で見つかっていない。


**漢数字刻印**



D: 阪大医学部跡地  
E: 大阪市北区中ノ島4-3  
H: 阪大医学部中ノ島キャンパス跡地や同校中ノ島センター前の敷石に見られる刻印。「四」は奈良駅車台でも見つかっている。数字は違えどよく似た体裁で、「漢数字を識別符丁に用いていた会社」が存在し、その会社の刻印である可能性が考えられる。




**“山+火”刻印**



×2


D: 毛馬桜ノ宮公園大川河岸  
E: 大阪市都島区中野町  
H: 源八橋北方の干潟にて採取。小口に押された1.5cm四方の刻印。該当会社は不明で、他に採取例もない。この干潟には明治中期～昭和期の煉瓦が多数転がっている。公園造成のために煉瓦を含む礫が用いられ、それが侵食でまろび出しているものと推定される。

**“桜+ツ”刻印**




D: 毛馬桜ノ宮公園大川河岸  
E: 大阪市都島区中野町  
H: 左記“山+火”刻印と同じ場所で採取。切れ込みのある五花弁にカタカナの「ツ」が刻まれる。該当会社不明。五花弁に「四」の刻印が真田山陸軍墓地にて見つかった。また京都市日本銀行京都支店地下には機械成形煉瓦に打刻された「ン」「へ」添字の煉瓦刻印が使用されている。M39当時で成形機械を使用していた会社、となると候補はかなり絞られる。

**“桜+漢数字”刻印**



D: 堺市堺区九間町民家敷石  
E: 堺区九間町2-1-23  
H: 八木栄次郎住居跡の民家の裏手に敷かれた敷石より採取。桜型の中に「クス」の文字と漢数字が入る。楠本煉瓦工場(泉北郡鶴田村大字上・明治29年)か。漢数字はバリエーションあり。またこれと並んで径1cmほどの小さな桜型刻印も見られる。


**“○A”刻印**



×2

D: 毛馬桜ノ宮公園大川河岸  
E: 大阪市都島区中野町  
H: 同左の干潟にて。厚さ10cmを超える大形の空洞煉瓦(硬質)の小口に押されていた。兵庫県尼崎市下坂部2丁目でも、舗装用煉瓦と思われる硬質煉瓦の長手に○A刻印が押されたものが見つかった。ただし刻印のサイズは異なる。


**“○ホ”刻印**



×2


D: 大阪城天守閣付近転石  
E: 大阪府中央区大阪城  
H: 大阪城天守閣の東隅転石。隣に明治28年に建設された大阪市水道局大手前配水地があり、それと関係する転石かも知れない(配水池に煉瓦が使われているのは確かで、柵内法面に煉瓦瓦礫も転がっている)。同所では添印つきの堺煉瓦、大阪鉄道由来構造物に見られるのと同系統の「M」刻印が見つかった。同系刻印が京都府宇治駐屯地補給部本部建物にある(京都府○刻印参照)。

**“二線+・”刻印**




D: 空家壁  
E: 堺市九間町東二丁目  
H: 空き家となった民家の壁に使われていたもの。該当会社は不明だが、露出している十数個の煉瓦に同じ刻印が見られた。

**豊中市城山町転石**



D: 墓地転石  
E: 豊中市城山町1丁目  
H: 城山町の高台の墓地にて採取。破線型の刻印。類似刻印は全国各地で見つかるが、線の太さ、間隔の取り方は京都府三室煉瓦跡地出土の刻印が最も近い。類似刻印は大阪府下で数件見つかった。


**(推定)伊藤煉瓦製造所**



×0.5


A: 泉南市男里  
B: 昭和16年(1941)～同35年  
D: 高砂市曾根町転石、大阪市東淀川区三國本町転石、豊中市桜塚高等学校(旧・豊中高等女学校)塀  
E: 大阪府豊中市中桜塚3-1  
F: 昭和13年  
G: 印影・釉薬  
H: 高砂市曾根町の転石は長手・小口に釉薬がけした化粧煉瓦。『泉南市年報』に泉南の伊藤煉瓦が化粧煉瓦を製造していたことが記されている。分布も大阪寄り。

**“日”刻印(深日煉瓦?)**




A: 和歌山県海草郡西和佐村1  
B: 明治30年(1897)頃  
E: 和歌山市西和佐、大阪府岬町転石  
G: 印影・分布  
H: 漢字の「日」と読める刻印。付近では現岬町の深日煉瓦製造所が該当。『工場通覧』では一度しか現れないが、明治30年時点で職工30人という記録があり、操業していたことは確かなようだ。

**“●一”刻印**



E: 大阪府岬町転石、泉南市岡田転石  
H: 『泉南市紀要』で岬町の旧家の庭で見られると紹介されている刻印。同型の刻印が岡田浦や加太砲台等で見つかった。泉南地方の煉瓦工場のものか(工場表では信達村の中橋煉瓦を仮定したが強い根拠があるわけではない)。

**中橋煉瓦工場**



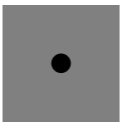
B: 泉南郡鳴滝村  
H: T13『大阪府実業参考録』では煉瓦製造工場・中橋長治郎広告にこの屋号が掲げられている。煉瓦刻印には未検出。

**”菱S”刻印**




D: 大阪府吹田市路傍、奈良県天理市路傍、高知県魚梁瀬ダム脇瓦礫ほか  
H: 『集成』では福岡県高橋煉瓦が同形の刻印を用いていたとあるが、それよりも小さな1辺20mm程度の”菱S”刻印が各地に分布している。該当会社不明。古い構造物では見られないため比較的新しい刻印であるかも知れない(高橋煉瓦のバリエーション?)。

**”■”刻印**




D: 大阪市平野区瓜破3、平野本町3、16、八尾市植松町2、5、東成区大今里3、大東市新町4 各転石  
H: 東大阪一帯に分布する刻印。径1.8cm(6分)のもの1.5cm(5分)のものがあり、後者は陰刻■の底にさらに凹みが見られることがある。6分サイズは兵庫県の日成産業の刻印にも見えるが、6分と5分とが混在している場面もあり、この2つでグループ化すべきものようである。該当会社は不明。

**共栄組**



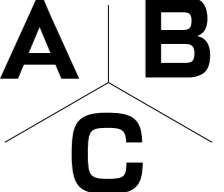
A: 西成郡難波村  
B: 明治20年(1887)～21年頃  
G: 文献(朝日新聞M21.8.4. 3面)  
H: 新聞広告掲載の社章。煉瓦刻印としては未検出。

**英数字刻印**



D: 砲兵工廠荷揚門付近転石  
E: 大阪府中央区大阪城  
H: 平野川に面して築かれた荷揚門の付近の瓦礫より採取。他に同じ体裁の「2」が見つかった。砲兵工廠が陸軍連隊建造物に使われていたものと思われる。


**柴島干潟転石 形状指示印(上淀川橋梁橋脚瓦礫?)**



D: 柴島干潟転石(上淀川橋梁瓦礫?)  
F: 明治31年(1898)～明治34年  
H: 干潟脇に転じている12ft井筒瓦礫や異形煉瓦に検出。太いゴシック体のアルファベットで、いずれも肉厚異形煉瓦に打刻。同系統のものが上新庄市街地で見つかった(上神崎川橋梁瓦礫)。干潟検出の異形煉瓦はいずれも肉厚で、後期型の堺煉瓦刻印のある普通煉瓦も多く、上十三川橋梁の複線部出胎ではなく昭和28～29年に改築された上淀川橋梁の橋脚瓦礫とみられる。

**兵庫県**


**関西煉瓦会社**



×0.2

A: 兵庫県明石郡垂水村(神戸市垂水区)  
B: 明治21年(1888)3月～33年  
D: 舞子市街、大阪市此花区西九条1-12塀、大阪市玉造神社壁ほか  
G: 文献、印影  
H: 明治19年に大阪府豊島郡小曾根村(現豊中市)に操業した会社が起原。後に明石郡垂水村内山田村へ移転し、ハンター商会を通じてプレス成形機械を購入、英国人技師の指導のもと煉瓦を製造した。大阪毎日新聞明治22年11月15日号にこの三本線社章を掲げた広告あり。


**関西煉瓦会社**



×0.3


H: 工場所在地と考えられる垂水区西舞子1丁目は今でも同社製品が転している。平の一方に凹みをつけ社章と“B.C.H.J.”を陽刻したもの、平の両面に凹みがあるもの、平らな面に陰刻したものなどバリエーションも多い。特に陰刻タイプには舗装用煉瓦かと思われる肉厚のものがある(9x4x3 inch)。いずれの煉瓦にもプレス成形特有のライナー痕と、金型を固定したネジ穴と思われる浅い円形凹みがあるのが特徴。それぞれの字体は若干の異同がある。

**神戸外国人居留地 卵形下水道管使用煉瓦**




C: 明治元年(1867)頃～明治5年頃  
D: 神戸外国人居留地下水道管、東水環境センター展示煉瓦下水道管(神戸外国人居留地下水道管より移設)  
E: 神戸市中央区  
F: 明治5年(1873)まで  
H: 「上」「下」は卵形下水道管に使用された煉瓦施に見られ、また円形管の煉瓦には「三」刻印が検出されている。両管合わせて7種類の煉瓦が使われており、その施工位置を示すものとして打刻されたものか。

**山陽窯業株式会社**




A: 兵庫県印南郡伊保村中筋(高砂市中筋)  
B: 大正6年(1917)3月～14年4月山本窯業所  
D: 高砂市中筋路傍転石  
G: 分布状況、印影  
H: 印南郡に最初に興った中播煉瓦を継承? 最盛期には姫路市にも分工場を有したが、大正末に分裂し、山本窯業所と東山煉瓦になった。該刻印は大阪府生野区や東淀川区にも分布。後者は堺煉瓦刻印と共見いが見られる。

**山陽窯業(東山工業所?)**




A: 兵庫県飾磨郡四郷村見野(姫路市四郷町見野)  
B: 大正6年(1917)3月山陽窯業見野工場～14年1月東山工業所  
D: 姫路市四郷町見野花壇緑石  
G: 分布状況、印影、聞き取り  
H: 東山工業所の縁故者の「うちの煉瓦が姫路男山の濱本邸に使われている」という証言にて確認。現地にはこれと左記「山」刻印があり、見野でもこの意匠化された刻印が見つかった。楷書の「山」刻印もあり(四郷町、明石市舞子海岸)。

**大正煉瓦株式会社**



A: 曾根工場・兵庫県印南郡曾根村1777(高砂市曾根町)  
B: 大正6年(1917)4月～昭和41年(1966)  
D: 工場跡地転石  
G: 分布状況、印影  
H: 現高砂市曾根町の天川右岸に操業。郡内各地に分工場を所有し、昭和期には播州煉瓦合同とともに二大巨頭をなした。楷書の「大」刻印は四角い印台がうっすら写っていることが多い。伊藤煉瓦「イ」も同様。

**大正煉瓦株式会社**




D: 阿弥陀工場付近路地敷石  
E: 高砂市阿弥陀町阿弥陀1555付近  
G: 分布状況、印影  
H: 大正煉瓦阿弥陀工場(大正9年9月創業)の付近で採取。跡地はセンチリーアミーという団地になっており、古煉瓦が多数転用されているが、「K6」「K9」刻印が見られるだけである。

**大正煉瓦株式会社?**




D:明石市魚住町浜谷転石  
H:細い平体の星印に「正」の字。場所柄大正煉瓦(株)の刻印と推定されるが、大ぶりで見ると視覚的な印は播州地方の煉瓦工場のでない。煉瓦サイズは長手不明、小口96～98mm、厚60mm。

**和田煉瓦株式会社**




A: 印南郡伊保村中筋893(高砂市中筋)  
B: 大正8年(1919)4月和田窯業所～昭和2年(1927)和田煉瓦～22年頃川崎重工業(株)製鋼工場炉材工場～昭和30年日成産業  
G: 印影、聞き取り  
H: 工場跡地や大字中筋一帯に分布。釘で「ワ」を形作ったものや、それが左右反転した印もある。大阪府江之子島庁舎の発掘現場からも出土。増築に用いられた煉瓦か。

**和田煉瓦株式会社**




A: 印南郡伊保村中筋893  
B: 昭和2(1927)年～昭和22(1947)年頃  
E: 中筋町2丁目排水溝  
G: 印影  
H: 和田煉瓦の「ワ」刻印はいくつかバージョンがあり、鹿島中筋敷石(高砂市阿弥陀町阿弥陀1971付近)では細線のもの、大阪府池田市では釘で逆向きに作ったと思われるものが採取されている。中小工場では定型の印を持たなかった?

**(推定) 播陽窯業株式会社**




A: 印南郡別所村北宿860  
B: 大正7年3月～昭和3年播州煉瓦合同別所工場  
D: 姫路市別所町小林空地転石  
E: 小林409付近  
G: 分布状況、印影  
H: 現在播州倉庫(株)になっている工場跡の向かいの住宅地で、「パンヨウ」の「ハ」か。北宿の民家壁にも簡略化された「ハ」の刻印が見られるが、内部符丁である可能性がある(「ハ」「口」刻印参照)。

**播州煉瓦合同株式会社**



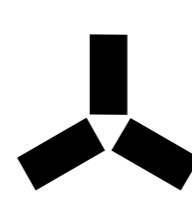
A: 印南郡西神吉村岸516  
B: 大正5年5月中播煉瓦岸工場～昭和3年11月播州合同煉瓦岸工場～昭和43年バンレン(株)  
C: 戦前?  
D: 高砂市各地  
G: 文献、印影  
H: 昭和3年に中播煉瓦が播陽窯業、山本窯業所を買収して成立。他工場を次々と傘下にし最大手に成長した。『帝国商工録』昭和8年度版に社章記載がある。初代社長小田千代蔵の「ヨ」か。

**播州煉瓦合同株式会社**




C: 戦後?～昭和48年  
E: 高砂市神瓜5丁目16付近転石  
G: 聞き取り、分布状況、印影  
H: バンレン(株)(播州煉瓦合同より改名)の社章に酷似。昭和22年頃より播煉で煉瓦製造をしていた女性は、放射状三本線が社章であったと証言している。志方工場が煉瓦製造を終える昭和48年頃まで使用? 三本線を社章とした工場は多く、判別が難しいが、製造年月と思われる数字が添えられたこのタイプは播煉のものとして間違いはない。播煉は昭和35年5月にJIS工場となった。

**播州煉瓦合同株式会社**




D: 加古川市西神吉町岸民家前転石  
E: 岸445  
G: 文献、聞き取り  
H: 旧印南郡周辺では三本線が密接した形の刻印もよく見られる。上の印影より細いものもあり、Y字に見える。また「35」という添印があるものも。現社章に近い左掲印は比較的新しいものか。大阪市天王寺区天下茶屋駅近くの民家では、この刻印と「K3」が共使いされている。

**伊藤窯業株式会社**




A: 印南郡曾根町2554  
B: 大正5年(1916)5月中播煉瓦曾根工場～昭和7年(1932)9月伊藤窯業～昭和35年伊藤恒業～昭和44頃移転  
E: 高砂市各地(曾根工場付近)  
G: 印影、分布状況  
H: 楷書の「イ」。素地工場があったという現高砂市南池ではこの刻印煉瓦を庭の舗石に用いている家がある。

**西播煉瓦製造所**




A: 神崎郡香呂村香呂(香呂200)  
B: 大正6年(1917)10月～昭和13年東亜耐火工業所(耐火物・マサ製造)  
D: 相坂隧道(大正10年建設)  
E: 姫路市香寺町  
G・H: 相坂隧道の煉瓦は麓にあった西播煉瓦が供給したと伝えられ(工事関係者の名を刻んだ扁額に工場主伊賀徳三郎の名がある)、隧道西口ポータルの笠石煉瓦にこの刻印があるのを確認した。朝来市生野町や京都市伏見区深草フチ町周辺でも発見例あり。

**関野煉瓦製造所**




A: 印南郡曾根町2736  
B: 大正5年(1916)3月～昭和18頃播州煉瓦合同関野工場～昭和33よりCB製造  
C: 大正10年(1921)以降昭和18迄?  
D: 姫高砂市阿弥陀町民家敷石  
E: 高砂市阿弥陀町南池238  
G: 印影  
H: 単純な三角形。工場主関野与平が10年2月18日に商標出願・同4月2日に取得(第127256号)。豊中市岡町住宅地や阿弥陀町南池民家敷石で見られる(右記参照)。

**明石陶管(株)?**




A: 明石市魚住村中尾(S12:中尾1058)  
B: 大正6年(1917)4月明石窯業(株)～昭和8年明石陶管(株)～戦時中に西島455に移転・瓦製造専業?(2006年廃業)  
D: 明石市魚住町浜谷、大久保町西島転石  
H: 魚住の工場跡近傍で検出。同所には「菱+AT」の刻印が入った粘土瓦も見られた。明石陶管時代の刻印か。

**(推) 播州煉瓦(株)?**



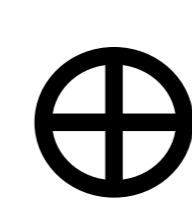
A: 加東郡来住村黍田(小野市黍田町)  
B: 大正6年(1917)5月～大正14年頃  
D: 黍田市街地転石  
H: 加古川線市場駅の西にある空地を中心に、黍田市街地の各所で検出される刻印。同じ刻印煉瓦が三木鉄道三木線の遺構(宗佐跨道橋)で検出されている。同線は播州鉄道が大正5年に建設したもので、提唱者の一人である稲岡猪之助の住まいも黍田にあった。鉄道建設用の臨時工場として始まり、その頃から使用されていた印か。

**英字・英数字刻印**




D: 高砂市阿弥陀町民家敷石ほか  
E: 高砂市阿弥陀町魚橋  
H: 大阪市中央区・住友銅吹所で検出されている英数字・英字刻印のセット。阿弥陀町南池238に刻印煉瓦を庭に敷き詰めた民家があり、Kn、推定山陽窯業「山」(楷書)、和田煉瓦「ワ」、大正煉瓦「大」などとともに「H」が使われている。この「H」と同じものが和歌山県由良町民家壁にあり「7」「8」「9」刻印と共使いになっている。ここから逆算して印南郡工場の使用印と推定される。

**英字・英数字刻印**



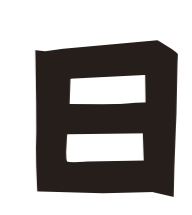
D: 姫路市別所町別所転石、高砂市阿弥陀町魚橋転石  
H: 別所で検出したものは角丸異形煉瓦の裏表に打刻。魚橋のものは断片で裏表に打刻される。「田」の意匠化とみて原田商会煉瓦工場を推定してもよいかも知れない。

**“カネマル”刻印**




D: 姫高砂市阿弥陀町民家敷石  
E: 高砂市阿弥陀町魚橋  
G: 分布状況、印影  
H: 左記南池民家に見られる対応不明刻印の一。長手を横にした配置で上記の「カネマル」刻印が打刻されている。同じ刻印が山陽電鉄伊保駅近くでも見つかるが、現時点の発見例はその二点のみである。機械整形煉瓦に押されているのも興味深い。

**日成産業株式会社**




A: 印南郡伊保村中筋893  
B: 昭和30年(1955)～昭和37年(1962)頃  
D: 中播煉瓦株式会社跡  
E: 高砂市阿弥陀町魚橋 G: 分布状況、印影  
H: 和田煉瓦近傍でも採取されており、同社後継の日成産業(株)の刻印と推定される。聞き取りによれば大正煉瓦阿弥陀工場も一時期日成産業の工場であったという。大阪府豊中市でも発見例がある。

**“Kn”刻印**



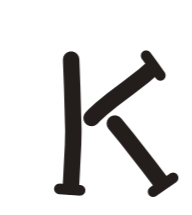
D: 県下各地  
H: 兵庫県下、特に旧印南郡・神崎郡域に分布する刻印。数字は1から9まで確認されており、煉瓦工場跡地の周辺で特定の数字が見られる傾向がある(例えばK8は姫路市香呂の西播煉瓦周辺に集中)。播州煉瓦合同と提携し、同社の煉瓦を販売した榎野株式会社(本社:徳島県)のOEM用に用いられていた刻印か?(数字が工場を表す?)。

**弘栄煉瓦(岸工場)刻印**




D: 元・弘栄煉瓦岸工場社宅  
E: 加古川市西神吉町岸450  
H: 「K」と「・」のみの煉瓦刻印。「K」のみのもも同所で確認。元社宅にお住いで、戦後に弘栄煉瓦に勤めておられたという方が「K」刻印は弘栄煉瓦のものだと証言して下さった。右記釘Kも同様。ただし数字つきのものはご存知でなく、別系統or別時期のものとして推測される。

**弘栄煉瓦(岸工場)刻印**




D: 元・弘栄煉瓦岸工場社宅  
E: 加古川市西神吉町岸450  
H: 「K」を釘で形成した刻印で、機械成形煉瓦に押されていることが多い。恐らく弘栄煉瓦(岸工場・戦後)の刻印。粘土を切った後、一次乾燥場に運び、一昼夜乾かして一間板に並べ替える際に打刻された(作業台に作り付けてあった)という。岸工場社宅周辺や大正煉瓦阿弥陀工場跡、姫路市四郷町明田(東山工業所隣町)、播州煉瓦合同志方工場付近(加古川市志方)などで見つかる。

**“へ”刻印(別所煉瓦?)**



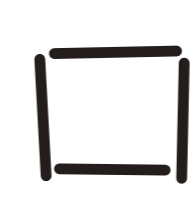
D: 高砂市曾根町転石、豊中市岡町転石  
H: 曾根市街地、尼崎市、豊中市岡町などで転石が見つかる。別所煉瓦の「へ」か。豊中市岡町のは住宅敷地の地中に埋もれていた構造体から。同じ構造体から活字体の「へ」だけでなく弓なりに変わった釘刻印が見つかり、これも「へ」を意識したものと思われる。

**“ハ”刻印**




D: 神戸市垂水区西舞子舞子漁港付近転石  
H: 幅4cmほど/線描の「ハ」。当刻印煉瓦があった付近には、昭和以降は煉瓦工場は存在しない。類似刻印が播陽煉瓦工場付近(姫路市別所町北宿)の民家壁、豊中市岡町住宅街で見つかる。播陽のハか? 識別符丁か?(大きさは右掲の「口」に似る)

**“口”刻印**




D: 姫路市四郷町見野、明田転石  
H: 板に釘を打ち付けて作ったと思われる印。見野では同じ大きさの「ホ」も確認され、作業者の識別符丁と推測される。とすると左印も識別符丁ということになる。

**“ホ”刻印**



D: 播州煉瓦合同曾根工場跡(高砂市曾根町2734)付近転石  
E: 高砂市曾根町  
H: 識別符丁か。見野で採取されたものより二回り以上小さい(幅2cm強)。

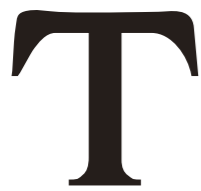
**新和窯業株式会社**



A: 印南郡志方町上富木51  
B: 昭和35年(1960)→41年播州煉瓦合同志方工場→43年バンレン(株)  
D: 工場周辺転石  
G: 分布状況  
H: ○にSinwaのS。昭和41年に播煉に買収され志方工場となる。他の分工場がコンクリートブロックやPC建材の製造に移行するなか、最後まで赤煉瓦を製造した。兵庫県伊丹市大鹿、姫路市見野で採取例あり。

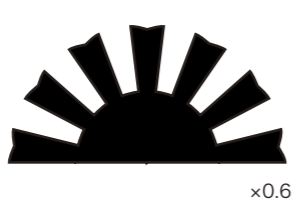


東播窯業株式会社



A: 加東郡滝野町高岡528  
B: 昭和23年(1948)~43年頃廃業  
D: 工場周辺排水溝  
G: 印影、分布状況  
H: 工場周辺で発見例あり。大阪府豊中市の市街地でも転石が採取されている。

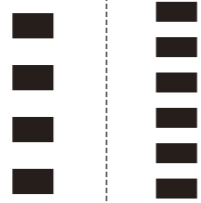
朝日窯業株式会社



x0.6

A: 工場・大阪府泉北郡鳳村ノ尾崎第二工場・兵庫県尼崎市大洲村  
B: 大正6年(1917)9月、10月~大正9年  
D: 阪急岡町分譲地(亡失)、西九条転石  
E: 大阪府豊中市岡町北2  
G: 文献  
H: 『大日本商工録第二版』に記載。大阪市港区西九条で転石の採取例あり。幅5cmほどの大振りの刻印。かつて岡町分譲地でも見られたが、宅地開発によって失われた。

阪鶴鉄道野田尾トンネル転石



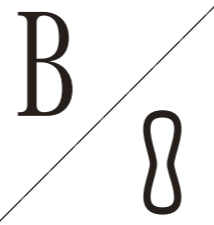
D: JR福知山線旧線(旧・阪鶴鉄道)野田尾トンネル東口  
E: 神戸市北区道場町生野  
F: 明治32年(1899)頃  
H: 阪鶴鉄道によって建設されたトンネルの残余煉瓦。棒線を複数個並べたもので、4本から7本までのパリエーションが確認されている。線数で作業者を分別したのか。他では見られない刻印で、自前工場のもので推定される。

阪鶴鉄道野田尾トンネル転石



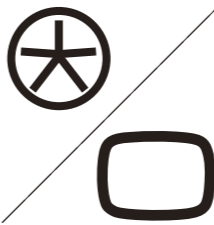
D: JR福知山線旧線(旧・阪鶴鉄道)野田尾トンネル東口  
E: 神戸市北区道場町生野  
F: 明治32年(1899)頃  
H: 野田尾トンネルで見られる刻印のパリエーション。単純棒線を組み合わせたもので、若干掠れているが、採拓により上図のように復元できる。

栃原隧道使用煉瓦



D: 栃原隧道東口(補修箇所)  
E: 兵庫県朝来郡生野町口銀谷  
F: 明治37年(1904)(昭和30年(1955)以降改修?)  
H: 栃原隧道東口の改修部分に見られる刻印で、小口に押されているのが特徴。1cm角ほどの小さな刻印である。他に「〇」もあり。同じものが生野銀山事務所や生野市街(右掲の倉庫)でも見られる。

生野市街倉庫使用煉瓦



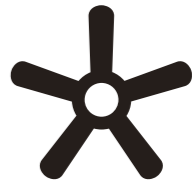
D: 朝来市生野町口銀谷市街地の倉庫  
F: 昭和30年(1955)以降?  
H: 生野町口銀谷の釜山軌道跡に建てられた倉庫に見られるもので、軌道が廃止された昭和30年以降に建設されたものと思われる。栃原隧道のものと同様小口に押されており、生野地方特有の傾向を示している。

漢数字刻印



D: 由良要塞生石山第一砲台  
F: 明治22年頃着工~27年竣工  
H: 第一砲台の最も東の掩体部で見られる刻印。トメハネがある楷書体の漢数字の刻印で、他に「六」「二二」などがあつた。同型の刻印は関西鉄道草津線(現JR草津線:明治22年開通)の鉄道付帯構造物にも見られ、同じ会社の刻印である可能性がある(旭商社の使用印か?)。また、書体の異なる漢数字刻印(線描のような字)が大阪府下を中心に広範囲に分布している。

“五本線+〇”刻印



D: 由良要塞生石山第三砲台附近転石、兵庫県姫路市山陽電鉄姫路駅遺構、鹿児島県旧集成館遺構  
H: 生石山第三砲台背後で転石の状態を採取。堺煉瓦の刻印に似るが、中央の〇から放射状に5本線が伸びる。他に山陽鉄道姫路駅跡遺構(転車台跡付近から遊離状態で出土)、鹿児島県尚古集成館の発掘調査現場で出土。後者では大阪盛秀館の耐火煉瓦とともに出土しており明治10年代後半~20年代前半に使用された刻印と見て間違いはない。

“細★”刻印



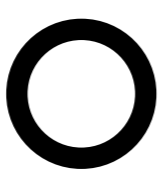
D: 生石山第四砲台  
F: 明治22年(1889)4月 ~23年5月  
H: 生石山第四砲台で複数採取。大阪市街や堺市街で見られる★印刻印より稜が細いのが特徴。また中央にネジ穴跡らしきバリもある。★刻印は塔本煉瓦商会のもので推定しているが、明治38年に興った会社であり、第四砲台の建設時期とは一致しないため別会社のものである可能性がある。

山陽鉄道姫路駅転車台・市川橋梁使用煉瓦



D: 山陽鉄道姫路駅転車台遺構、市川橋梁  
E: 姫路市豆腐町、姫路市花田町一本松  
F: 姫路駅転車台: 明治21年(1888)、市川橋梁: 明治22年  
H: 1.8cm四方の四角に漢字。山陽鉄道姫路駅転車台遺構からは「製」「吉」「末」「廣」「煉」「化」「造」「賣」「部」の9種類が採取されており、また下掲「口+カナ」刻印の共食いも確認されている(『豆腐町遺跡II』。同会社のパリエーション?)。同様の刻印が山陽鉄道建設の橋梁構造物に見られ、市川橋梁では「製」「煉」を見ることができる。

勝部煉瓦製造所



A: 兵庫県武庫郡西宮町  
B: 明治20年(1887)頃~23年頃  
G: 文献(朝日新聞M21.12.24 4面広告)  
H: 広告に社章として?掲げられたマーク(後日の広告にはなし)。"〇"形刻印は各地で検出されており、一社に帰納することは不可能だろうが、例えば由良要塞成山第一・第二砲台などは勝部煉瓦の存続期間中に建設されている。大阪市西区川口(旧川口居留地)の川口聖マリア幼稚園脇に残る煉瓦壁の"〇"刻印も同工場のもの?

市川橋梁使用煉瓦



x0.6

D: 市川橋梁上り線橋脚  
E: 姫路市花田町一本松(市川河岸)  
F: 明治22年(1889)  
H: 山陽鉄道開通時に建設された市川橋梁の橋脚(上り線右岸側河辺に臨んで立つ一本)の小口に見られる刻印。径3cmほどの「乙」。検出数は一つだけで、市川橋梁の他の煉瓦にも見られない。山陽鉄道使用煉瓦特有の大型煉瓦に打刻されている。

別所町転石異形煉瓦”C”



E: 姫路市別所町路傍・畑転石  
H: 撥型異形煉瓦に”C”。この撥型は長手の辺長223mm、円弧の差し渡し142mm、小口差し渡し100mm、厚58mmほどで、明治29年鉄道作業局制定の円形ウェル使用煉瓦の規格に一致しない「開いた」形をしている。また該煉瓦以外の異形煉瓦も見られなかった。別所には大正初期から中期にかけていくつかの煉瓦工場が存在したが、その製品だという確証はない。

中江煉瓦工場



A: 城崎郡豊岡町の内小田井町  
B: 明治40年(1907)5月~大正初年頃  
D: 河本重次郎邸壁  
E: 豊岡市京町  
G: 検出状況  
H: 中江種造の甥・河本重次郎の邸宅の壁に使われている煉瓦に検出。この壁は中江工場の製品が使われたことが『中江種造伝』下巻pp.180-181にある。機械成形煉瓦に打刻。平露出量に比して検出数は少なく、社章に準じるものとして使われていたかどうかは疑問が残る。

荒船浄配水場転石



D: 城崎荒船配水場近傍転石  
F: 明治39年暮れ竣工、大正期に拡張  
H: 旧湯島村の上水道施設。近傍に転じていた煉瓦瓦礫の中に検出。この時期但馬地方には(記録に残るような)煉瓦工場はなく、使用社は特定できていない。

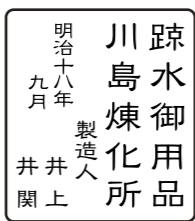
”口斗”刻印



D: 川崎重工兵庫工場”レンガのあゆみ碑”使用  
F: 昭和59年(1982)  
H: 同工場の労働組合事務所として使われていた建物の解体を記念し、その煉瓦で構築されたという碑に見られる。明治15年竣工と推定されている福井県敦賀港駅ランプ小屋に全く同じ刻印が使われている。該建物の由来は正確には不明だが、大正7年開設の飛行機工場関連施設と見られ、ランプ小屋の建造時期にも示唆を与える意味深な刻印である。

京都府

川島煉瓦(疏水納入品)



A: 葛野郡川岡村川島?  
D: 琵琶湖疏水記念館収蔵品(掲示)  
F: 明治18年9月  
G: 印影、文献  
H: 琵琶湖疏水記念館展示パネルより。川島煉瓦所が「疏水御用品」として製造した煉瓦で、明治18年9月製造、製造者名も刻まれている。「工場表」では拾えていない煉瓦工場だが、京都大阪間鉄道の建設に際して浅田政三が川岡村川島に設けた煉瓦工場の系譜を引くものであるかも知れない(右記参照)。

川島煉瓦(疏水納入品)



x0.7

D: 琵琶湖疏水第一隧道第一堅坑付近転石  
F: 明治18年8月6日~22年6月11日  
G: 印影  
H: 堅坑脇の沢で採取した断片から。直径3.5cmほどの円形の印で、中央に組番号と思われる漢数字を配置。堅坑工場の開設から疏水事務所煉瓦工場の開設(明治19年6月26日)までの間に採用されたものと考えられる。浅田政三工場製と考えられる桂川橋梁使用煉瓦に似た坯土である。

琵琶湖疏水事務所煉瓦工場



x0.8

A: 京都市山科区御原西町  
B: 明治19年(1886)6月26日~22年10月31日  
D: インクラインねじりまんぼ笠石  
E: 京都市東山区  
F: 明治23年10月  
G: 印影、文献  
H: 琵琶湖疏水建設のために臨時に設けられた煉瓦工場が用いた刻印。数字は複数種あり。インクラインねじりまんぼの笠石に露出しているものが観察しやすい。

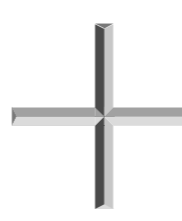
琵琶湖疏水事務所煉瓦工場



x0.8

D: 疏水路傍転石  
G: 印影、文献  
H: 疏水工事事務所の煉瓦工場では複数種類の刻印を使用した。ねじりまんぼや第二隧道呑口に見られるような四角形のものほか、路傍で採取したこの刻印のように楕円形囲ったもの、円形に「第一」「第二」を付したものが知られている(『集成』)。

琵琶湖疏水第三隧道付近転石



x2

E: 京都市山科区日ノ岡堤谷町  
F: 明治22年3月  
H: 琵琶湖疏水第三隧道呑口付近に散在する屑煉瓦の中より採取。楔形の断面をした十字型の刻印である。押されている煉瓦は第三隧道に用いられているものと質感が酷似しており、このポータルを建造する際に生じた屑煉瓦と見られる。現地ではこの他にも左記「蹴」刻印や右記の「ソ」刻印も見つかっている。

琵琶湖疏水第二隧道吐口使用煉瓦



E: 京都市山科区御陵封ジ山町  
F: 明治20年12月  
H: 琵琶湖第二隧道吐口ポータル裏に露出している刻印。厚さが80mmにもなる大型の煉瓦の長手に押されている。「ソ」に漢数字を添えた刻印は第三隧道呑口前転石(「ソ二九」)、安朱川橋梁の笠石裏(「ソ四四」)などがあり、疏水各所で用いられていた可能性が高い。「ソ」は疏水事務所のソか?

琵琶湖疏水安朱川橋梁使用煉瓦



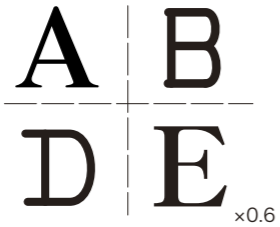
E: 京都市山科区安朱中溝町  
F: 明治21~22頃?  
H: 安朱川橋梁下流側笠石の裏側に観察できる刻印。琵琶湖疏水では工事事務所の煉瓦が用いられたと一般的に言われているが、それ以外の煉瓦も使われていたことを示す貴重な刻印である。

“□+カナ”刻印



D:空地転石  
E:京都市伏見区深草フチ町2  
H:深草煉瓦製造所(竹村煉瓦製造所)のあった深草フチ町で複数採取。1cm角の小さな刻印で、カナは内部符丁と想像される。姫路駅旧転車台から同形刻印が見つかっており、明治20年代初頭に使用されていた印と考えられる(竹村煉瓦はM20.3創業とする資料があるが、同社刻印と見るのは尚早か)。豊中市中桜塚でも同刻印の発見例がある。

桂川橋梁橋脚使用煉瓦



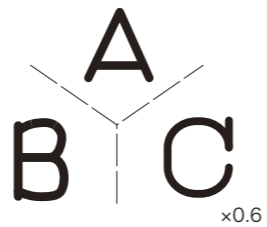
D:JR京東線桂川橋梁旧橋脚(上流側)  
E:京都市南区/西京区  
F:明治9年(1876)  
H:京都大阪間鉄道建設当時の橋脚(12ft円形ウェル)の残余と考えられる構造物より採取。扇形・楔形の異形煉瓦に押されており、施工位置を示すものと思われる。明治29年の規格にはない「D」「E」が存在することから規格化以前の製品=開業時の橋脚と考えられる。

桂川橋梁橋脚使用煉瓦



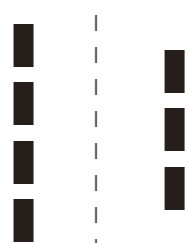
D:桂川橋梁橋脚  
E:京都市南区  
F:明治9年(1876)  
H:現行線に使われている煉瓦橋脚の上流側小アーチ部に見られる刻印。小口に押されている。A~D刻印と同様、施工位置を示すものであるのかも知れない(「C」の変型か?)。京都~大阪間鉄道の煉瓦は主に浅田政三の煉瓦製造所が供出したと『日本鉄道請負業史』にある。

桂川橋梁橋脚使用煉瓦



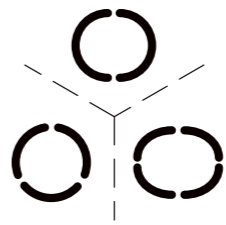
D:JR京東線桂川橋梁旧橋脚(下流側)  
E:京都市南区/西京区  
F:明治31年(1898)  
H:下流側の12ft円形橋脚に使われている厚手の煉瓦にはA~Cの刻印が確認できる。このA~Cは明治29年に正規化された12ft円形橋脚使用異形煉瓦の形状に一致する(ただし厚さは正規より厚く、3インチで作られている。制定規格は2-1/4インチ厚)。

三室煉瓦跡地出土煉瓦



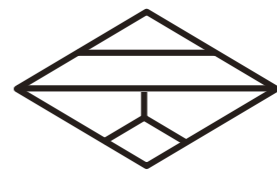
D:三室煉瓦工場跡地出土煉瓦  
E:宇治市宇菟道  
F:明治30年(1897)~35年頃(明治末まで稼動?)  
H:三室煉瓦跡地で出土。同所での検出数はごくわずかで、むしろ無刻印の焼損煉瓦=三室煉瓦製品のほうが大多数である。また焼損でない煉瓦には焼けた赤土の付着が目立ち、窯を構成していた煉瓦=他社製品の可能性が高い。同形刻印が宇治駐屯地補給課本部建物にあり。

“割丸”刻印



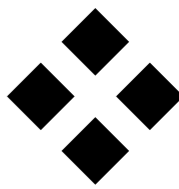
D:舞鶴市西神崎転石、山陰本線下の郷橋梁  
H:竹野丹後煉瓦製造所があった西神崎で検出した刻印。円を2つ割あるいは4つ割した印で、いずれも手成形煉瓦に押される。位置的に竹野丹後煉瓦製造所の使用刻印かと思われ、煉瓦の質も似通っているが、湊神社に残る同社寄進の手水舎の煉瓦には刻印は見られない。M40竣工の下の郷橋梁では三つ割印を検出。新温泉町釜屋の三柱神社壁にも二つ割。

“菱線”刻印



D:元織工場壁?  
E:京都市上京区北町614  
H:上京区神明町と北町の境の辺りにある煉瓦壁に見られる刻印。元の用途ははっきりしないが、昭和26年京都市明細図(京都府立京都学・歴史館蔵)にはこの付近に「織工場」が存在した。厚60mm前後のJISサイズに近い手成形煉瓦の小口に打刻。

“四つ菱”刻印



D:同志社大学第二寮跡  
H:同志社大学第二寮跡を示す石碑の鋪石として使われている煉瓦。平の角際に押されている(実物は最下の菱が他と比べて半分ほどの大きさになっている。元からそうなのか、焼成時の歪みなのかは不明)。第二寮は1876年(明治9年)発祥というが、該煉瓦との関係は不明である。なおこの鋪石には漢数字刻印の煉瓦も使用されている。

“⊖”刻印



D:宇治駐屯地補給部本部建物(旧陸軍宇治火薬製造所建物)  
E:京都府宇治市五ヶ庄  
F:明治28年(1895)?  
H:西側軒下線形裏に。同系刻印“⊖口”が大坂城本丸で見つかつており、同所の大手前配水池の毀損屑or第4師団由来と考えられるが、前者の開業年と宇治火薬製造所開所年是一致的(明治28年)。この頃操業していた工場の印か。同建物では小型“⊖+カナ”刻印も見つかっており、これも大坂城本丸同所で検出されている。

“桜+クス+漢数字”刻印



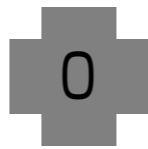
D:宇治駐屯地電計課鋪石(旧陸軍宇治火薬製造所建物由来)  
H:電計課建物入口の鋪装に使われている煉瓦の中にこの刻印がある。堺市八木家勝手口の“梅+クス+漢数字”刻印と類似する構成で、なおかつ、宇治駐屯地内に多数ある“桜+カナ”や“梅+カナ”刻印とも連綿があるように思われる。ただし刻印のサイズは上記刻印より一回り小さい。検出数も一つだけである。

京都鉄道社章刻印



D:亀岡市街転石、第一地蔵トンネル  
E:亀岡市  
H:亀岡市の旧市街地や旧山陰街道沿いで見られる刻印。明治32年に園部まで開業した京都鉄道の社章と同一で、漢数字の添印を有する。旧線を利用して嵯峨野観光鉄道の地蔵第一トンネルにも同じ刻印煉瓦が使用されている。亀岡市篠町馬堀には京都煉瓦製造(株)の分工場があったので、同社が京都鉄道に納入した製品に押されたものである可能性が考えられる。

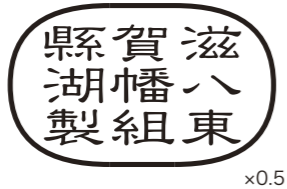
“太十字+英数字”刻印



D:伏見区深草 師団橋付近転石  
E:伏見区深草キト口町  
H:岸和田煉瓦の×刻印を連想させるシェイプだが、刻印の底に英数字“O”と思われる形がある。岸和田煉瓦の添印パターンとは異なるようである(岸煉の添印は独立のカナor漢数字)。また“O”は十字に対して正対する向きに押されており、“×”形が基本の岸和田煉瓦の印ではないと見るべきだろう。むしろ英数字の書体などは奈良県奈良教育大転石の刻印と似通ったところがある。



湖東組



A:蒲生郡船木村  
B:明治19年(1886)10月~明治25頃?→明治42年中川煉瓦製造所  
D:舞鶴市赤れんが博物館蔵  
G:印影  
H:明治中期に近江八幡に興った煉瓦製造所。恐らく鉄道の北進に伴い勃興した煉瓦工場と思われる。敷地は後に中川煉瓦製造所となる。なお統計書では明治25年度まで掲載。『煉瓦史』では昭和9年より大晋煉瓦~昭和44年まで営業とあるが、統計書では確認できなかった。

中川煉瓦製造所



A:蒲生郡船木村(現近江八幡市)  
B:明治42年(1909)~昭和36年→昭和37年大晋レンガ  
D:工場跡地付近の民家の庭、大津市京町路傍  
G:印影  
H:「中」を「川」で囲む。工場跡北方の民家の庭で縁石に使われている古煉瓦にこの刻印が認められる。大津市京町には機会整形煉瓦に打刻したものであり。同社ホフマン窯の煉瓦(大正5年建造)には見られない。大晋煉瓦は○大の刻印を用いていた。

異形煉瓦 “丙丁+英数字” (湖東組 形状指示“イ”)



D:近江八幡市池田本町転石(仁保川橋梁橋脚瓦礫)  
H:池田本町在所内に無数に転じている異形煉瓦に。“丙”に添う英数字は2から5まで、“丁”は4、6、7を確認。後者は撥形異形と扇形異形に押されたものがあり、形状指示ではなく識別印として打刻されたものとみられる。また採取した撥形異形煉瓦(9ft円形井筒用“E”に相当)には小口に“イ”字の打刻あり。これが形状指示印とみられる(“イ”=“イー”=“E”)。

異形煉瓦 “甲乙+英数字” (湖東組 形状指示“ビ”)



D:東近江市JR東海道線海三場川暗渠  
F:1888年(明治21)7月  
H:海三場川暗渠の通路部縁石に検出。刻印のあるものは12ft円形井筒用異形煉瓦で、“甲”・“乙”の組が12ft井筒用煉瓦を、“丙”・“丁”の組が9ft井筒用の煉瓦を製造していたものと読める。またこの縁石には小口に“ビ”を打刻したのも多い。その他勢陽形井筒用“E”に相当)には小口に“イ”を検出したのと同系統の釘印もみられるのが興味深い。

中川煉瓦ホフマン窯使用印



D:中川煉瓦ホフマン窯(試焼室)  
H:中川煉瓦ホフマン窯の保存工事の後、煉瓦を試し焼きした房(現在もその時の煉瓦が保存されている)の天井部に検出。小口積りで積まれた用異形煉瓦で、“甲”・“乙”の組が12ft井筒用煉瓦を、“丙”・“丁”の組が9ft井筒用の煉瓦を製造していたものと読める。またこの縁石には小口に“ビ”を打刻したのも多い。その他勢陽形井筒用“E”に相当)には小口に“イ”を検出したのと同系統の釘印もみられるのが興味深い。

前河原避溢橋使用煉瓦 (湖東組 形状指示“ビ”)



D:前河原避溢橋橋脚部  
F:1889年(明治22)3月  
H:3@15ftの煉瓦アーチ橋の橋脚壁体を使用。打刻のある小口の幅は約100mm、それに隣る無刻印の小口は110mm強あり、東海道線建設の頃に定型化した12ft円形井筒の撥形異形煉瓦“B”をてれこに積んで壁体を構築していることがわかる。即ち“ビ”=“ビー”=“B”。また左記“イ”の存在を踏まえると一連の形状指示印が湖東組時代のものであることも判明する。

異形煉瓦 “シ” (湖東組?)



D:瀬田川橋梁近傍転石  
H:12ft井筒のC型異形煉瓦に打刻。平に打刻したものと長手側面に打刻したものを検出した。サイズ感では湖東組“丁4”の扇形異形煉瓦長手に“エ”を打刻したものが検出されたので、その打刻パターンから“シ”も湖東組使用印と考えてよさそうである。



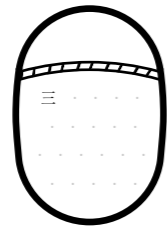
### 杉本煉瓦製造所



×0.7

A: 甲賀郡寺庄村大字葛木  
B: 明治21年(1888)1月～  
D: 草津線国分暗渠、新道暗渠  
G: 印影  
H: 頂部に二線を加えた三角形で「甲賀／杉本／葛木」の文字を囲む。新道暗渠のものの方がわかりやすい。創業時期から関西鉄道草津線の建設に合わせて起業したものと想像される。葛木西光寺の煉瓦壁は杉本工場が寄進したものと伝わっており、ここには3インチ系肉厚煉瓦が多数使われている(湖東線複線化に供給か)。

### 杣川橋梁下瓦礫転石



×0.7

D: 草津線杣川橋梁下瓦礫転石  
H: 杣川橋梁の橋脚改築に伴うものとみられる瓦礫に検出。幅3.5cm、高さ5cmほどの大きな小判型。飾り野で内部が1:2に区切られ、大きな区画には文字が刻まれていたようである(左上「三」のみ判読。線も文字も陽刻になるよう作られた印のため土が詰まりやすく不鮮明になってしまっているようである。胎土は杉本煉瓦製品に似る。)

### 草津線御庄野橋梁



D: 関西鉄道草津線御庄野橋梁  
E: 明治23年(1890)竣工  
H: JR草津線貴生川駅東方に残る開通当時の橋梁。帯石やデンティルの裏に漢数字刻印を確認することができる。同じ書体の漢数字「六」が由良要塞生石山第一砲台や山陽鉄道市川橋梁で見つかっており、関連が伺える。大阪堺市旭商社の使用した印(識別印)か。

### 大津市中央転石



×0.6

D: 大津市中央二丁目町家溝  
H: 厚77mmを超える厚型煉瓦に打刻。大振りな刻印で琵琶湖疏水事務所工場使用の刻印に似る。他に「甲二」と思われるものもあり。

### 大津市本丸町転石



D: 大津市本丸町1丁目  
H: 小判型の中に「クニ」の文字。「ク」だけであれば同所の黒川煉瓦が推定されるが、旧膳所町の旧東海道沿いにある民家の煉瓦壁では「ム四」と思われる刻印も見つかっている。カナ部分まで識別符丁であったとすれば膳所監獄での使用が考えられる(黒川煉瓦の従業員数は最大でも20名強)。

### 江州煉瓦



A: 滋賀県栗太郡物部村319(守山町浮気319)  
B: 大正7年(1918)10月～昭和47年(1972)  
D: 高槻市民家前転石  
G: 文献  
H: 現守山市に創業した県下最大の煉瓦工場。山田村(草津市)、膳所町(大津市)などに分工場を有した時期もある。奈良市や大阪府高槻市でも採取例があるが、大阪府南部や兵庫県では未見。煉瓦の流通状況を知るうえで興味深い例。

### 長浜駅倉庫使用煉瓦



D: 長浜駅倉庫基礎(長浜鉄道スクエア蔵)  
E: 滋賀県長浜市北船町1-41  
H: 旧長浜駅の倉庫跡から発掘された煉瓦に押された刻印。井桁菱に「は八」の文字(井桁の内部に三本線?)。長浜鉄道スクエアの解説によればJR草津線沿線の構造物でも同じ刻印が見つかっているという。そうであれば明治10年代から20年代にかけて存在していた会社の刻印ということになる。四日市煉瓦製造会社の初期の使用印か(刻印表三重県の部参照)。

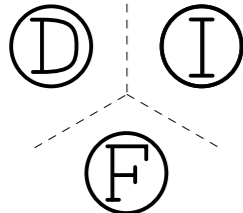
### 勢陽組”ウ”@海三場川暗渠



×0.5

D: 東近江市JR東海道線海三場川暗渠  
F: 1888年(明治21)7月  
H: 海三場川暗渠通路部の縁石に。他にも組印と思われる四角の印、カナ印の一部と思われるものなどを検出。三重県の煉瓦がここまで運ばれてきたことを示すもので、当時の資材管理・配分方法の妙が窺えて興味深い。米原市旧中仙道沿いでも勢陽組印の刻印煉瓦を採取しているが、それも東海道線建設に絡むものだったのだろう。

### ”○+英字”(市古工場識別印)



D: 東海道線向川暗渠ほか  
E: 彦根市金沢町ほか  
F: 明治22年(1889)1月、21年8月  
H: 東海道線(湖東線)開業時の構造物、アーチの小口に検出。同型の”○+B”が静岡県半場川橋梁(M20.12竣工)や新潟県旧坂口新田トンネル(M21.3竣工)で見つかっている(『鉄道と煉瓦』p.45)。塚町暗渠で採取した転石には愛知の市古工場の印があり、同社の識別印であることが判明した。東海道線工事に際して三河煉瓦が広範囲に運ばれていたのは興味深い。

### ”○+カナ”(市古工場識別印)



D: 東海道線海三場川暗渠  
E: 滋賀県東近江市今町  
F: 明治21年(1888)7月  
H: 小口打刻。湖東線沿線で見られる”○+英字”と同サイズ・同形の○で”シ”を囲む。判の作りもよく似ている(ごんにち普遍的に見られるハンコのように印面のエッジが立っている繊細な印)。愛知県碧海郡市古工場の初期の識別印で、湖東線では区間最初に竣工した海三場川暗渠に見られるのが唯一の検出例。

### ”キ”、“メ”(市古工場識別印)



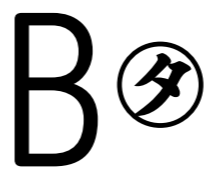
D: 東海道線鯉川橋梁  
E: 滋賀県東近江市今町  
F: 明治21年(1888)7月  
H: 幅約1cmの小ぶりのカナ。肉厚普通煉瓦の小口に打刻。関西圏では珍しい小口打刻。市古工場が所在した碧南市久香で上記印と同系統のカナ印”へ”と”市古製”印・”㊦”印を打刻したものが見つかっており、市古工場で使用された内部符丁印とみられる。

### 菱井桁”九”(刈谷士族工場)



B: 明治21年頃?  
D: 大津市大萱転石  
H: 大萱中心部の寺院の前に転じていたもの。3インチ系の肉厚煉瓦に打刻。地理的に貝塚煉瓦の井桁印かと思われたが、貝塚煉瓦製品で井桁内に識別符号を入れたものはなく、むしろ刈谷士族工場(大野工場)の初期の使用印と見たほうが良さそうである。県下では屋ノ棟川隧道跡で刈谷士族工場の井筒印を検出している。

### 異形煉瓦”B”+”○夕”(奥田煉瓦工場)



D: 近江八幡市池田本町 畑転石  
H: 肉厚撥形異形煉瓦(12ft用”B”)に打刻。ほぼ同じものが彦根市金沢町の畑でも検出された(添印の中身は未判別)ほか、添印を有さない”B”も同所に転じていた。湖東線で12ft円形井筒を採用したのは瀬田川橋梁のみで(ここでも同じ構成の刻印を検出。かなの場合もあり)、そこから離れた近江八幡市・彦根市に転じているのは不思議である。”○+カナ”添印、形状指示印”B”はいずれも奥田煉瓦工場所在地(岐阜県大垣市矢道)で検出。

### 異形煉瓦”A”+”○イ”(奥田煉瓦工場)



D: 瀬田川橋梁近傍転石  
H: 肉厚撥形異形煉瓦(12ft用”A”)に打刻。識別印パターンから奥田煉瓦工場の製品とみられる。瀬田川橋梁下の浅瀬には各種の肉厚異形煉瓦を検出するが”C”は見つけられていない。宇曾川橋梁近傍の瓦礫に検出したものが同系統か。なおこの系統の肉厚煉瓦は厚2-3/4インチ前後で、正確な3インチ厚ではない=初代線開業時の煉瓦ではない可能性が考えられ、工場操業期間からも複線化時の煉瓦と判断される。

### 異形煉瓦”C”、“E”



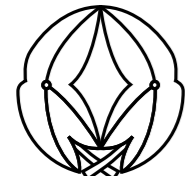
D: 彦根市金沢町転石(宇曾川橋梁近傍)  
H: 宇曾川橋梁の10数m上流に転じていた川中の瓦礫から。状況から宇曾川橋梁に使用されていたものとみられる。”E”についてはほぼ同じものを近江八幡市池田本町(仁保川橋梁井筒瓦礫?)に検出。明治34年の複線化時の橋脚を構成していたものか(”丙丁+英数字”刻印参照)。

### 漢数字”四二”?(西尾士族生産所?)



D: 近江八幡市池田本町転石(仁保川橋梁橋脚瓦礫)  
H: 在所内転石の一つ(肉厚普通煉瓦)に検出。かなり彫りの深い刻印。愛知県西尾市や静岡県第一・第二浜名橋梁初代井筒に見られる”デー”・”イー”異形煉瓦に添印として押されている漢数字印によく似ている。初代仁保川橋梁の建設のために持ち込まれたものか。彦根市金沢町では”イー”異形煉瓦に”三五”を打刻したのも。

### 抱き沢瀉印



A: 碧海郡根崎村  
B: 明治30年(1897)4月～39年頃  
D: 草津市、彦根市転石  
H: 東海道線工事やその複線化の際には中京地域からかなりの量の煉瓦が持ち込まれたようで、鉄道沿線で中京の煉瓦を見かけることが多い。三河の製品とみられる抱き沢瀉の刻印もその一つ。草津では民家玄関先の敷石に、彦根市金沢町では宇曾川橋梁の解体瓦礫とみられる中にこれが混じっていた。中央に漢数字を持つ場合とそうでない場合あり。

# 奈良県

## 大和煉瓦株式会社



A: 奈良県帯解村大字今市無番地  
 B: 明治29年(1896)～昭和11年頃  
 D: 公園花壇緑石  
 E: 豊中市野田町14  
 G: 印影、聞取り  
 H: 明治31年開通のJR桜井線京終駅～樺本駅間の煉瓦構造物、奈良駅旧転車台で見ついている。帯解での聞き取りにより同社の刻印と確定。『帯解村誌』には同社が大阪方面に輸出したという記述があり、それを裏付けるように大阪府豊中市野田町で採取されている。

## 小島煉瓦



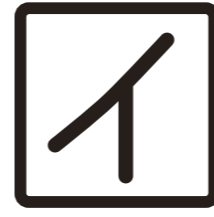
A: 奈良県南葛城郡掖上村柏原(御所市柏原)  
 B: 大正3年(1914)～昭和13年頃  
 D: 宮本延寿堂建物基礎、工場周辺  
 E: 高市郡高取町清水谷1011  
 F: 大正3年～10年頃  
 G: 印影、分布状況  
 H: 「小」の図案化。御所市掖上の民家、大淀町下淵、吉野町吉野山道路脇など、奈良県南部の市街地に比較的広範囲に分布。

## (推定) 吉野煉瓦株式会社



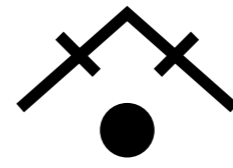
A: 奈良県吉野郡大淀町下淵  
 B: 大正9年(1920)3月～昭和初期?  
 D: 旧大淀桜ヶ丘小学校壁発掘現場  
 E: 奈良県吉野郡大淀町下淵959  
 F: 昭和初期  
 G: 分布状況、印影  
 H: 天川丹生街道沿線や吉野町に分布。『窯業銘鑑』大正13年版に名が見えるこの会社の刻印か(代表者吉井清三の「井」に因む?)。

## 奈良監獄



D: 奈良監獄(現・奈良少年刑務所)  
 E: 奈良県奈良市般若寺町18  
 F: 明治41年(1908)3月  
 G: 使用状況  
 H: カナを○または□で囲ったもので、外壁の笠石の裏側、壁の足元、正門前道路の花壇などで複数種類を確認できる。供給元は明らかでないが、旧監獄の収容囚人による製造と、その識別符丁である可能性が高い。

## “ツノヤマ+●”刻印



D: 奈良県大和高田市民家使用煉瓦  
 E: 奈良県大和高田市内本町  
 H: ツノのある「ヤマ」記号に丸点。煉瓦の裏面に打刻されている。民家花壇に使用されていたもので、表側は確認できず。検出例はこの一例のみで付近に大きな煉瓦工場があった記録もない。小工場の使用印か。近鉄吉野線・JR線吉野口駅の駅前を通りには、この刻印とよく似た印の煉瓦がある(ツノのないヤマ形に●)。

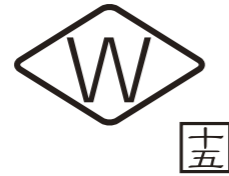
## “■+英数字”刻印 (奈良教育大転石)



D: 奈良教育大学(旧奈良歩兵第38連隊)構内転石  
 E: 奈良市高畑町  
 H: 印の台座と思われる四角型の底に英数字“0”。この英数字はいまで言うところの活字書体に似ている(手書き・手彫りではなく機械的に製造されたような印象を与える整った書体)。同系統の印を兵庫県洲本市の洲本アルチザンスクエア(旧金淵紡績洲本工場)の舗石で見ることができる。

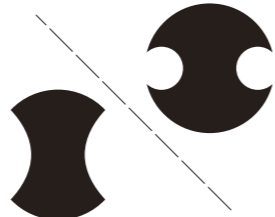
# 和歌山県

## 和歌山煉瓦石会社



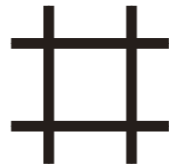
A: 本社/和歌山市久保丁4丁目、工場/那賀郡田中村窪  
 B: 明治21年(1888)11月～明治32年  
 D: 由良要塞生石山第二砲台  
 E: 明治22年頃着工～27年竣工  
 H: 大阪毎日新聞明治22年10月27日号4面にこの社章を掲げた和歌山煉瓦石広告がある。工場は田中村窪。同型刻印は兵庫県洲本市由良の生石山第二砲台やその周辺で採取されている。漢数字を四角で囲った径1cmにも満たない添印があるのが特徴。

## 和歌山煉瓦製造所



A: 和歌山県和歌山市太田61  
 B: 大正5年(1916)5月～昭和13年頃?  
 D: 工場跡転石  
 E: 和歌山市太田60  
 G: 焼損煉瓦  
 H: 紀ノ川流域を中心に大阪府南部などでも見られる分銅形刻印。聞き取りで工場跡地と判明した付近で刻印入り焼損煉瓦が多数発見された。廃業時期は戦後までずれ込む可能性あり(JIS規格煉瓦に打刻された例がある。和歌山市鳴神団地)。

## 岩橋煉瓦製造所



A: 和歌山県海草郡西和佐村1280  
 B: 昭和11年(1936)12月～(休止)～昭和35年(1950)岩橋煉瓦ブロック製造所～CB製造へ(現業)  
 E: 和歌山市岩橋1281  
 G: 現岩橋ブロック工業株式会社社章・社宅庭に刻印煉瓦多数  
 H: 正方の井桁(長手に正対する向きに打刻される)。紀ノ川流域で散見される。CB製造業として現業の岩橋ブロック工業が同じマークを社章とする。操業時期は要確認。

## 安原煉瓦製造株式会社



A: 海草郡安原村大字江南257(和歌山市江南)  
 B: 大正7年(1918)3月→～S14頃  
 D: 大字江南転石  
 G: 分布状況、印影  
 H: 交差した矢のような図形に「ス」を添える(安原の「ヤス」を示す判じ絵か)。字江南で複数の刻印入り煉瓦を確認。民家前転石では大きな山形の添印?が添えられたものがある。

## 紀の川市打田町窪転石



A: 和歌山県那賀郡田中村窪(現紀の川市打田町窪)  
 D: 大字窪転石、和歌山市駅近傍壁  
 H: 大字窪には明治21年～32年頃に和歌山煉化石(株)田中村製造所があり、旧池田隧道や紀和鉄道、由良要塞に煉瓦を供給したという記録がある。後期には宇田煉瓦工場と呼ばれていた(以上『田中村郷土誌』)。窪ではこの刻印煉瓦が検出されるが、和歌山市駅近傍壁に機械成形煉瓦に押されたものがあり、後年製造を再開しこの刻印を用いたものか。

## 合資会社川口煉瓦製造所



A: 有田郡湯浅町湯浅  
 B: 大正8年(1919)5月～大正15年頃  
 H: 『窯業銘鑑』大正14年版に社章掲載。頭文字KBを組み合わせたマークを三重線+四角で囲む(「川口」の意匠化?)。煉瓦刻印として打刻されていたかどうかは不明である。

## “\*”刻印



D: 由良要塞友ヶ島第二砲台、虎島堡壘  
 F: 明治27年(1894)～31年、同28年～30年  
 H: 友ヶ島第二砲台砲座の崩壊した断面に一つだけ露出。平の面に長手を接して焼いた痕がある。状況から建設時に持ち込まれたものであることは確かだが、どの会社のものかは不明。虎島堡壘の厠、および本工でも見られる。

## カナ刻印



D: 由良要塞深山第一砲台、姫路市立美術館(旧姫路陸軍兵器支廠)ほか  
 F: 明治25年(1892)7月～同30年9月/明治38年(1905)  
 H: 深山第一砲台の掩体部天井、姫路市立美術館外壁帯石裏に見られる(他に鳴門要塞鳥取弾薬本庫でも採取)。作業者識別印として押されたものと思われるが、それだけを押した煉瓦は特異で、特定の会社のもと思われる。建造時期から推定すれば旭商社(旭株式会社)が最有力。深山第一砲台では漢数字刻印と共使い。

## “\*”刻印



D: 和歌山市街民家敷石、由良要塞佐瀬川低堡壘前敷石  
 E: 和歌山県和歌山市有家96-3  
 H: Eの民家前の敷石に用いられているほか、佐瀬川低堡壘を流用した窯の敷石に用いられているのが見ついている。該当会社は不明だが和歌山県下の工場のものか。



# 大阪府 【耐火・耐酸・舗装】

## 貞徳舎

# TTT

A: 北区梅ヶ枝→東成郡鯉江村大字新喜多  
B: 明治18年(1884)→明治29年移転→現業  
G: 分布状況  
H: はじめ渡邊貞助、西村徳兵衛によって北区梅ヶ枝に創業、一時休業状態となるが北村市松が譲り受けて新喜多に移転。そして同地で現在も耐火物等の製造を続ける。掲げた刻印は同社前の溝に使われているもの。「TTT」のバージョンも存在。

## 貞徳舎



A: 東成郡鯉江村大字新喜多  
C: 昭和24年以降  
G: 印影、分布状況  
H: 貞徳舎工場前縁石に見られる刻印。中央に大きく打刻。この煉瓦には旧JISマークも打刻されているため昭和24年以降に製造されたものであることがわかる。

## 田中盛秀工場(盛秀館)



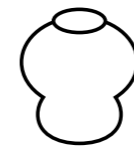
A: 西成郡下福島村  
B: 明治19年(1886)or11年→明治27年頃? (『明治工業史 化学工業編』ではM9→M24)  
G: 印影  
H: 大阪府下における民間の耐火煉瓦製造の草分けの一つ。『明治工業史』では明治9年創業で府下工場の草分けとされる。鹿児島県尚古集成館の発掘調査現場等で出土している(印影は報告書の拓本を模倣)。

## 正盛館坩堝製造所



A: 北区南同心町1  
B: 明治32年(1899)3月正盛館坩堝製造所→大正7年(1918)会社正盛館坩堝製造分工場→昭和37年(1962) 正盛館坩堝(株)  
G: 商標(『日本登録商標大全』第18集上)  
H: 大正11年12月22日商標取得。ただし坩堝に係る商標で、この頃には耐火煉瓦を製造していなかったかも知れない。「中辻」は工場主・中辻萬造を示す。

## 広瀬工場



A: 西区港屋町→港区石田外村町1-7  
B: 明治21年(1888)6月広瀬工場→大正8年(1919)6月(合資)広瀬耐火煉瓦製造所?→S5頃まで?  
G: 社章(『大日本商工録』S6)  
H: 府下耐火煉瓦工場の草分けの一つ。創業者・広瀬倉平は窯に置き忘れていた白墨が焼成後も形を保っているのを発見し、蠟石を用いた耐火煉瓦製造を思い立ったという。それがきっかけとなり三石での耐火煉瓦製造が始まった(『耐火煉瓦の歴史』)。

## 駒井製造所



A: 西成郡下福島村  
B: 明治23年(1890)9月→明治26年日本坩堝(合資)→明治33年頃北区同心町1へ移転・日本坩堝(合資)→大正11年頃?  
G: 商標(『日本登録商標大全』上巻)  
H: 工場主・駒井庄太郎が明治27年10月8日に取得(第5970号)。『大全』発行時には日本坩堝合資会社となり、同社の社章でもあったと思われる。

## 田中坩堝耐火煉瓦製造所



A: 西成郡津守村万歳橋西詰  
B: 明治25年(1892)3月→大正6年頃?  
G: 社章(『大日本商工録』第2集)

## 横山耐火煉瓦製造所



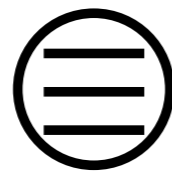
A: 南区難波稲荷町1  
B: 明治24年(1891)3月or25年10月→昭和7年(1932)頃?  
G: 屋号(『大阪人士商工銘鑑』M35)  
H: 府下に耐火煉瓦工場が興った頃、西区(現福島区)、北区同心町周辺、南区難波稲荷町&西成郡難波村にそれぞれ工場が集中した。横山耐火煉瓦製造所は難波稲荷町で大成した工場。

## 横山耐火煉瓦製造所



A: 南区難波稲荷町1  
B: 明治24年(1891)3月or25年10月→昭和7年(1932)頃?  
G: 商標(『大日本商工録』?)  
H:

## 丸三耐火煉瓦



A: 西成郡難波村  
B: 明治29年(1896)9月大阪丸三耐火煉瓦(株)→35年丸三組耐火煉瓦製造所→42年(31?)寛耐火煉瓦製造場→大正6年丸三寛耐火煉瓦(合名)→昭和35年丸三耐火煉瓦製造所  
G: 社章(『大日本商工録』S6)  
H: 難波村で隆興した耐火煉瓦工場。名称や所有者が点々と変わるため追いかけていく。由良要塞男良谷雷電射撃場ポイラー跡に刻印を見ることが出来る。S16頃には日本窯業がこのマークを使用?

## 丸三耐火煉瓦

# MARUSAN

A: 浪速区小田町1107(S35頃)  
B: 明治37年(1904)4月→大正10年頃?  
G: 印影、文献(『耐火物年鑑』S16)  
H: 北区の路傍で検出の耐火煉瓦刻印。日本窯業が◎マークを用いていた頃、丸三耐火煉瓦は「MARUSAN」表記を掲げていた(『耐火物年鑑』広告)。

## 製々舎



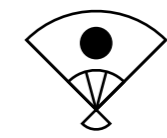
A: 北区安治川北通3  
B: 明治17年(1884)10月津枝商店→明治27年頃製々舎→明治40頃難波へ移転→大正7年頃?  
G: 印影、商標(『日本登録商標大全』上巻)  
H: もと津江工場として耐火煉瓦の製造を始め、やがて「製々舎」の社名を使うように。明治27年9月20日に商標取得(第5935号)、また大正5年に更新(第9集・第78696号)。旧ハンター邸でほぼ同じ刻印の耐火煉瓦が見つかっている。

## 東洋白煉瓦(株)



A: 出張所・大阪市東区今橋3-25/本工場・南河内郡住道村大字三箇1011/分工場・愛知県愛知郡千種町(T9頃)  
B: 大正6年(1916)6月~昭和3年頃  
G: 社章(『大日本商工録』第2輯)  
H: 『大日本商工録 第2輯』に社章掲出。住道の家庭農園に転用されている耐火煉瓦があり、ディンプルが施された平に上掲マークと「TOYO」の文字が刻まれていた。

## 東洋耐火煉瓦(合資)



A: 西区四貴島町  
B: 大正5年(1916)4月→大正12年頃藤本龍平工場?  
G: 社章(『日本登録商標大全』第9輯上)  
H: 大正5年5月29日商標取得(第79587号)。

## 品川白煉瓦(株)



A: 南区木津三島町1032(大阪工場)  
B: 明治37年(1904)4月→大正10年頃?  
G: 商標(『日本登録商標大全』上巻)  
H: 東京に創業し日本を代表する耐火物製造会社へ成長。大阪や岡山県にも分工場を有し、大阪工場には最新倒焰式ガス連続窯や粉砕・練成機械を導入して近代的な製造を行なった。商標取得は明治32年6月29日(第12893号)。

## 大日本窯業(株)



A: 西成郡千船村佃1530  
B: 大正6年(1917)8月→大正12年頃?  
G: 社章(『耐火物年鑑』S15)  
H: 「Dai Nihon Yougyou」の頭文字?を菱形内に配す。官報にも広告・社章掲出あり。

## 大阪窯業【舗装用煉瓦】



A: 泉南郡貝塚町(貝塚工場)  
B: 大正12年製造開始~戦前?  
G: 印影  
H: 大阪窯業が舗装用煉瓦として開発した製品。厚さ70mmを超える正四角柱のような形状が特徴。最初期の製品は平面にディンプルと社章、そして製造年の「1923」が刻まれている。平面への打刻はすぐに済み、平滑もしくは横一線に筋が入るタイプとなった(小口に大阪窯業マークを打刻。同社社史にも写真あり)。

## 大阪窯業【耐酸煉瓦】



A: 泉南郡貝塚町(貝塚工場)  
B: 明治40年(1907)3月~昭和62年(株)ヨータイ→平成5年(1993)大阪窯業本社と合併→平成15年(2003)頃敷地移転→現業  
C: 戦後?(JIS規格)  
G: 印影  
H: 大阪窯業貝塚工場跡地で採取の耐酸煉瓦。同社の耐酸煉瓦製造は明治39年頃に始まり、貝塚工場がその製造を担った。工場跡で検出したものは230×114×95mmのJISサイズで戦後のものと思われる。

## 大阪窯業耐火煉瓦(株)

# OYT

A: 貝塚市(貝塚工場)  
G: 分布状況  
H: 大阪窯業と大阪セメントの共同出資で昭和11年(1936)に設立。岡山県三石や日生にも進出して盛んに耐火物を製造した。後に(株)ヨータイとなり平成5年に親会社を吸収合併して今日に至っている。OYT刻印はOsaka Yogyo Taikaの略と思われ、同社製造の耐火煉瓦と考えられる。SKグレードの表記がない=古いものが多い。

## (株)ヨータイ

# OYK

A: 貝塚市(貝塚工場)  
G: 分布状況  
H: 左記OYTとは別に「OYK」と大阪窯業マークの入った耐火煉瓦も見られる。大阪窯業耐火だけでなく大阪窯業本社も耐火煉瓦を製造した?

## (合資)三和煉瓦製造所



A: 泉南郡鳴滝村(泉南市鳴滝)  
B: 昭和10年(1935)→昭和47年廃業  
G: 社章、分布状況  
H: 工場跡地近くに残る社の参道敷石(耐火煉瓦)に見られる刻印。三和煉瓦の使用した刻印とされる。

## (合資)三和煉瓦製造所



A: 泉南郡鳴滝村(泉南市鳴滝)  
B: 昭和10年(1935)→昭和47年廃業  
G: 印影、分布状況  
H: 左記同所にて見られる耐火煉瓦の刻印。井桁菱に「STR」。

## 大正耐火工業(株)?

# TRK

A: 大阪市東淀川区豊崎西通5-56→大阪市旭区今津町1006  
B: 大正10年(1921)1月~昭和28年(1953)頃?  
E: 民家軒先の花壇縁石  
F: 奈良県天理市川原城  
G: 印影  
H: 『耐火物年鑑第2巻』(昭和16)広告ではこの三文字を使用している。Rはrefractory(耐火物)の頭文字。

# 兵庫県

【耐火】

## 旭硝子(株)尼崎工場



A: 尼崎市大洲村→尼崎市西向島町  
B: 昭和3年(1928)10月→昭和32年頃まで製造?  
G: 商標(『日本登録商標大全』第8輯上)  
H: むしろガラス製品に見ることが多い社印。大正4年12月25日商標取得(第76649号)。申請時の住所は尼崎町之内大洲村大字新城屋碓角293。

## マグネシヤ工業(株)



A: 尼崎市築地南浜町4-62  
B: 大正9年(1920)10月→昭和16年頃?  
G: 社章(『窯業銘鑑』S16)  
H: 『窯業銘鑑』掲載の社章。亀甲に「M」を配す。社名の通りマグネシア型の耐火煉瓦を製造した。

## マグネシヤ工業(株)



A: 尼崎市築地南浜町4-62  
B: 大正9年(1920)10月→昭和16年頃?  
G: 商標(『日本登録商標大全』第16輯上)  
H: 同社が大正9年11月10日に取得した商標。子持ち野の亀甲に「K」を配す。同型刻印の耐火煉瓦が尼崎市路傍で見つかっている。

## 黒崎窯業(株)



A: 加古郡荒井村荒井1885(高砂市荒井)  
B: 昭和12年(1937)11月→昭和13年6月日本炉材製造(株)高砂工場→23年日本製鐵(株)広畑製鐵所高砂炉材工場→S32年播磨耐火煉瓦(株)本社工場→平成12年(2000)黒崎播磨株式会社  
G: 社章(『商工興信録 本州中部地方』T8)  
H: 大正7年創業。六稜の星形に「Y」形の線を配置。これが「T」になると鶴見耐火煉瓦の社章。

## 日本炉材製造(株)



A: 加古郡荒井村荒井1885  
B: 昭和13年(1938)~23年?  
G: 社章(『耐火物年鑑』S16)  
H: 東京に本社を置いた耐火物メーカー。昭和16年頃には左記高砂工場のほかに赤穂、三和にも工場を有した。

## 加藤耐火煉瓦(株)?

# KATO

A: 姫路市飾磨区細江1210-1  
B: 明治29年(1896)5月藤原耐火煉瓦部→大正3年(1914)3月加藤耐火煉瓦(株)→昭和47年以降まで存続  
G: 印影  
H: 県下耐火煉瓦工場の老舗。伊丹市岡田家住宅釜屋の竈に使用されている(SKグレード入)。

## 伊藤窯業(株)?

# I T O

A: 印南郡曾根町2554(高砂市曾根)  
B: 昭和7年(1932)9月→昭和45年頃まで製造?  
G: 印影  
H: 印南郡の煉瓦工場のなかで関野煉瓦と並んで耐火煉瓦を製造した会社。高砂市街で検出。

## 関野煉瓦製造所



A: 印南郡曾根町2736  
B: 大正5年(1916)3月~昭和18頃播州煉瓦合同関野工場~昭和33よりCB製造  
C: 大正10年(1921)以降昭和18迄?  
D: 姫高砂市阿弥陀町民家敷石  
E: 高砂市阿弥陀町南池238  
G: 商標(『日本登録商標大全』第18輯上)  
H: 工場主関野与平が10年2月18日に商標出願・同4月2日に取得(第127256号)。同社は赤煉瓦だけでなく耐火煉瓦も製造した。

# 京都府

【耐酸】

## 高山耕山化学陶器(株) 【耐酸煉瓦】



A: 五條工場: 下京区五条橋東4 / 大仏工場: 下京区大和大路通五條下る3 / 島原工場: 葛野郡大内村→T7以降大仏工場のみ  
B: 大正5年(1916)3月高山耕山陶器(合名)→大正7年4月株式→昭和16年頃  
G: 印影  
H: 二代目高山耕山によって創始された化学陶器工場で、製品のひとつとして耐酸煉瓦も製造した。舞鶴市赤れんが博物館蔵。

# 満州

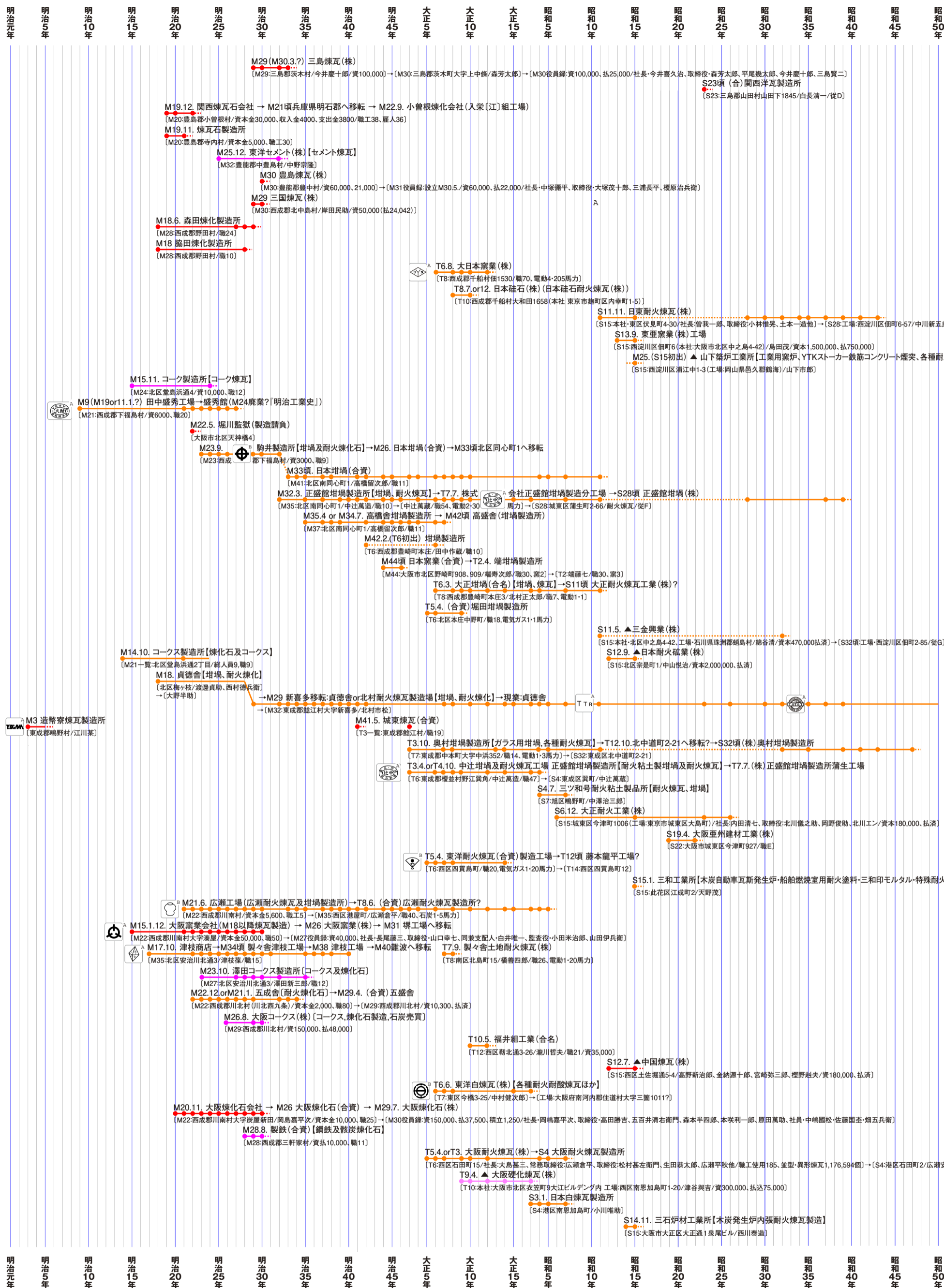
【耐火】

## 大連窯業(株)



A: 大連市栄町2  
B: 大正2年(1913)10月~  
D: 路傍緑石  
E: 大阪市港区築港2-8-4  
G: 社章(『耐火物年鑑』S16)  
H: 工場データは『満洲工場要覧』昭和10年版より。港区路傍に見られる該煉瓦には「リ-A」の文字も刻まれている。





### 【凡例】

刻印印影(右上英字は確度)  
 A: 確実 (社名・番号で印刷品出典、文庫等の裏付けあり)  
 B: ほぼ確実 (社名・番号で印刷品出典)  
 C: 推定 (刻印番号や類似・状況などから推定)  
 D: 仮定 (情報源等により否定される可能性あり)

同じ所在地で所有社・社名の変更があった場合「→」で列記

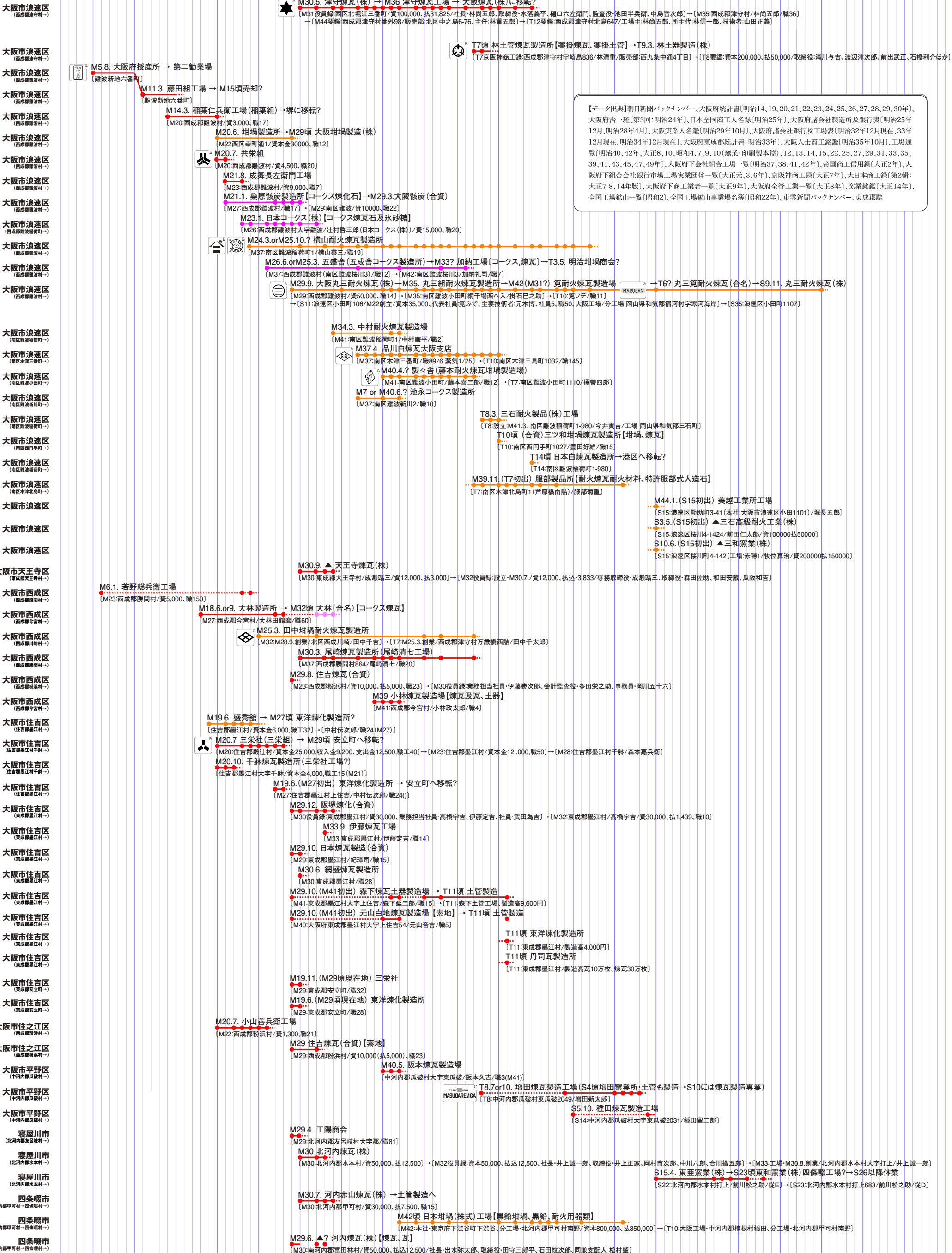
所在地(旧市町村名)/社長・代表者/工場規模(時点)

赤は煉瓦・化粧煉瓦、オレンジは耐火・耐酸煉瓦  
 桃はその他 破線は操業状況が不明or別業で操業

※創業年は資料によって異なる。信憑性の高いものを恣意的に採用した。  
 ※会社名×は設立だけで実稼働しなかったと思われる会社(職工数の登録がないなど)。  
 ※刻印は2019年12月現在における推定。データの蓄積により訂正される可能性あり。更新版は  
<http://goo.gl/bdQawG> (<http://www.kyudou.org/documents/up.php?file=kansaibricktable.pdf&mode=d>)にて配布。

## 大阪府下煉瓦工場の消長(1)

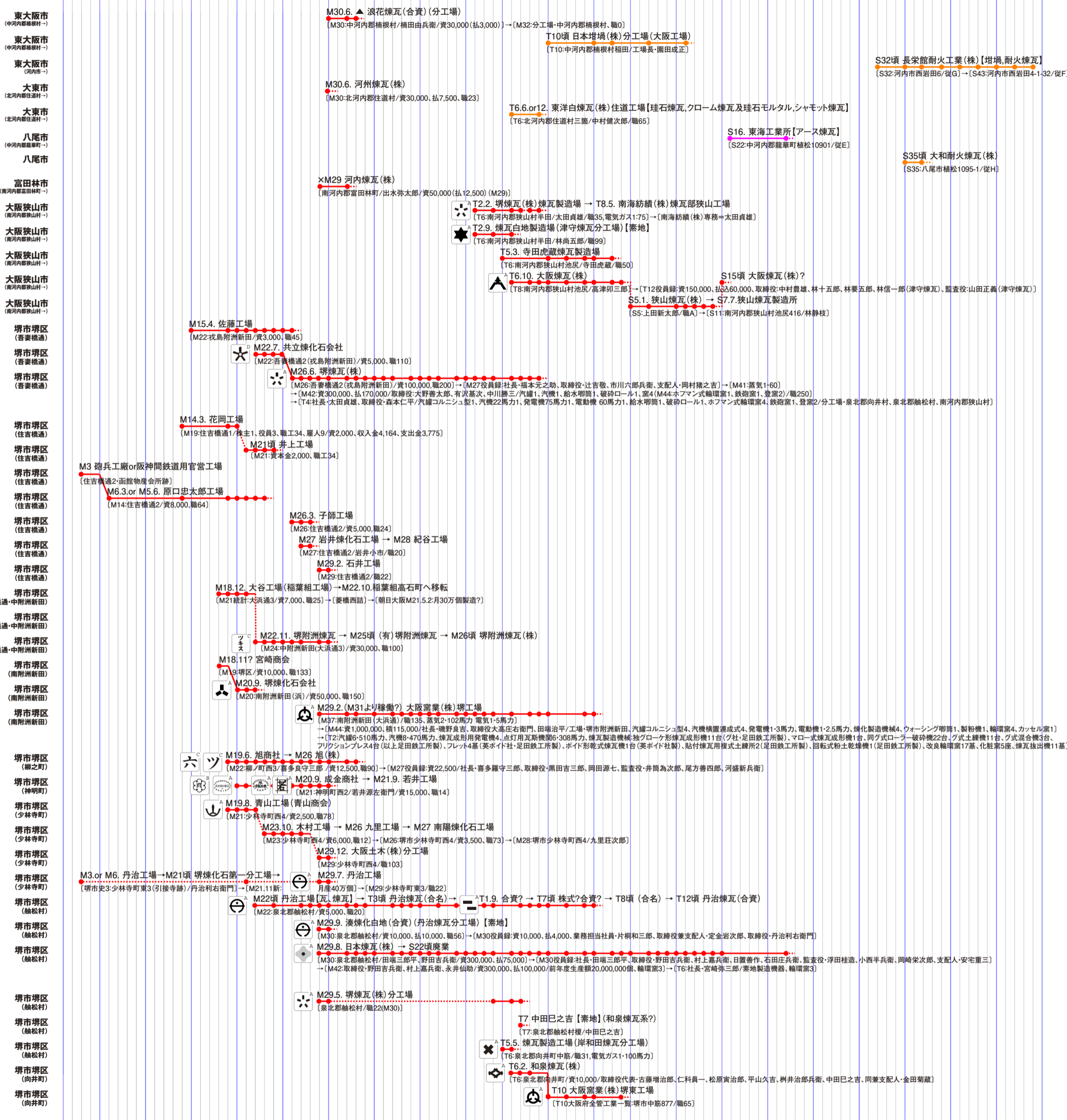
明治元年 明治5年 明治10年 明治15年 明治20年 明治25年 明治30年 明治35年 明治40年 明治45年 大正5年 大正10年 大正15年 昭和5年 昭和10年 昭和15年 昭和20年 昭和25年 昭和30年 昭和35年 昭和40年 昭和45年 昭和50年



### 大阪府下煉瓦工場の消長(2)



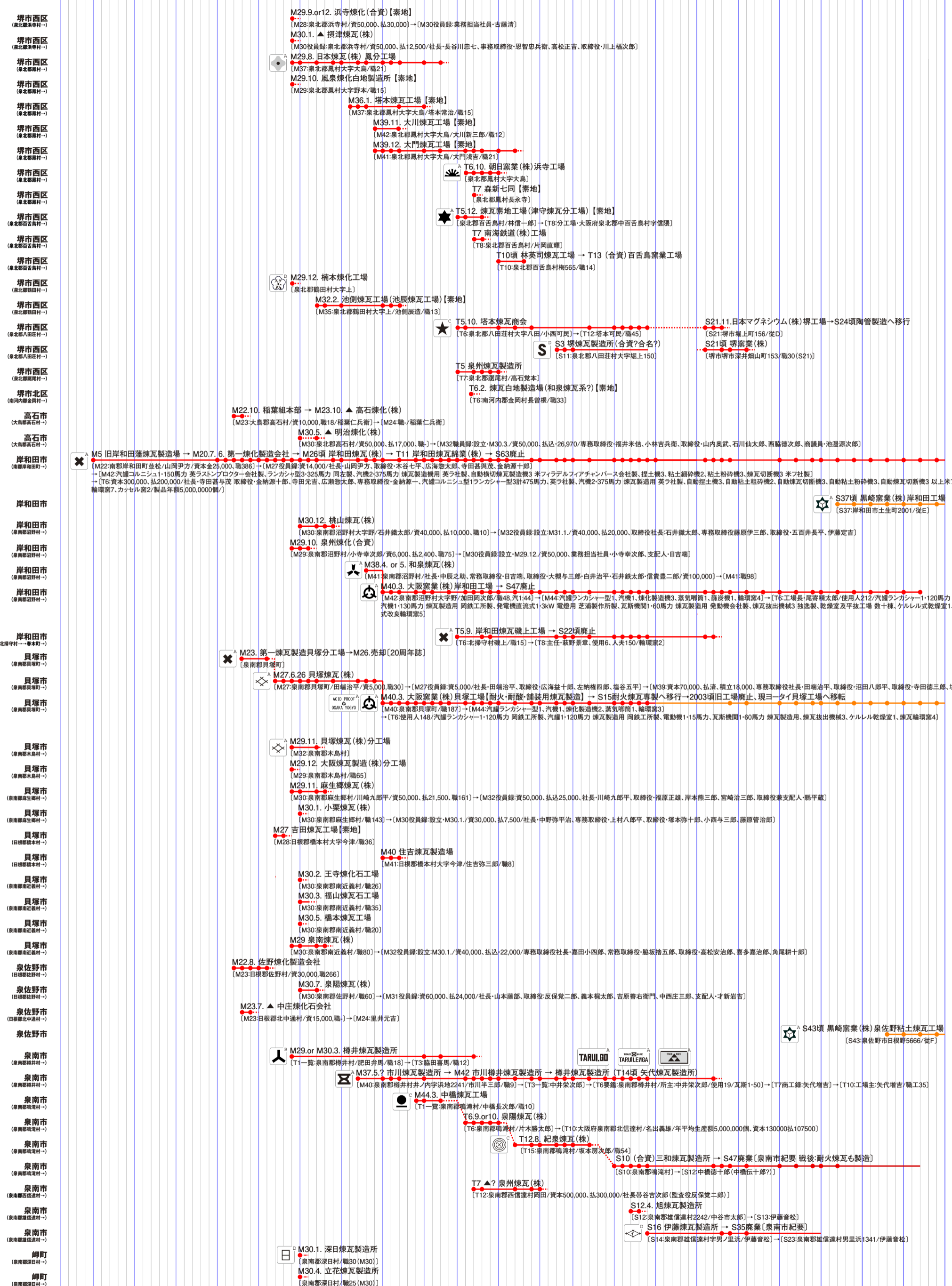
明治元年 明治5年 明治10年 明治15年 明治20年 明治25年 明治30年 明治35年 明治40年 明治45年 大正5年 大正10年 大正15年 昭和5年 昭和10年 昭和15年 昭和20年 昭和25年 昭和30年 昭和35年 昭和40年 昭和45年 昭和50年



明治元年 明治5年 明治10年 明治15年 明治20年 明治25年 明治30年 明治35年 明治40年 明治45年 大正5年 大正10年 大正15年 昭和5年 昭和10年 昭和15年 昭和20年 昭和25年 昭和30年 昭和35年 昭和40年 昭和45年 昭和50年

### 大阪府下煉瓦工場の消長(3)

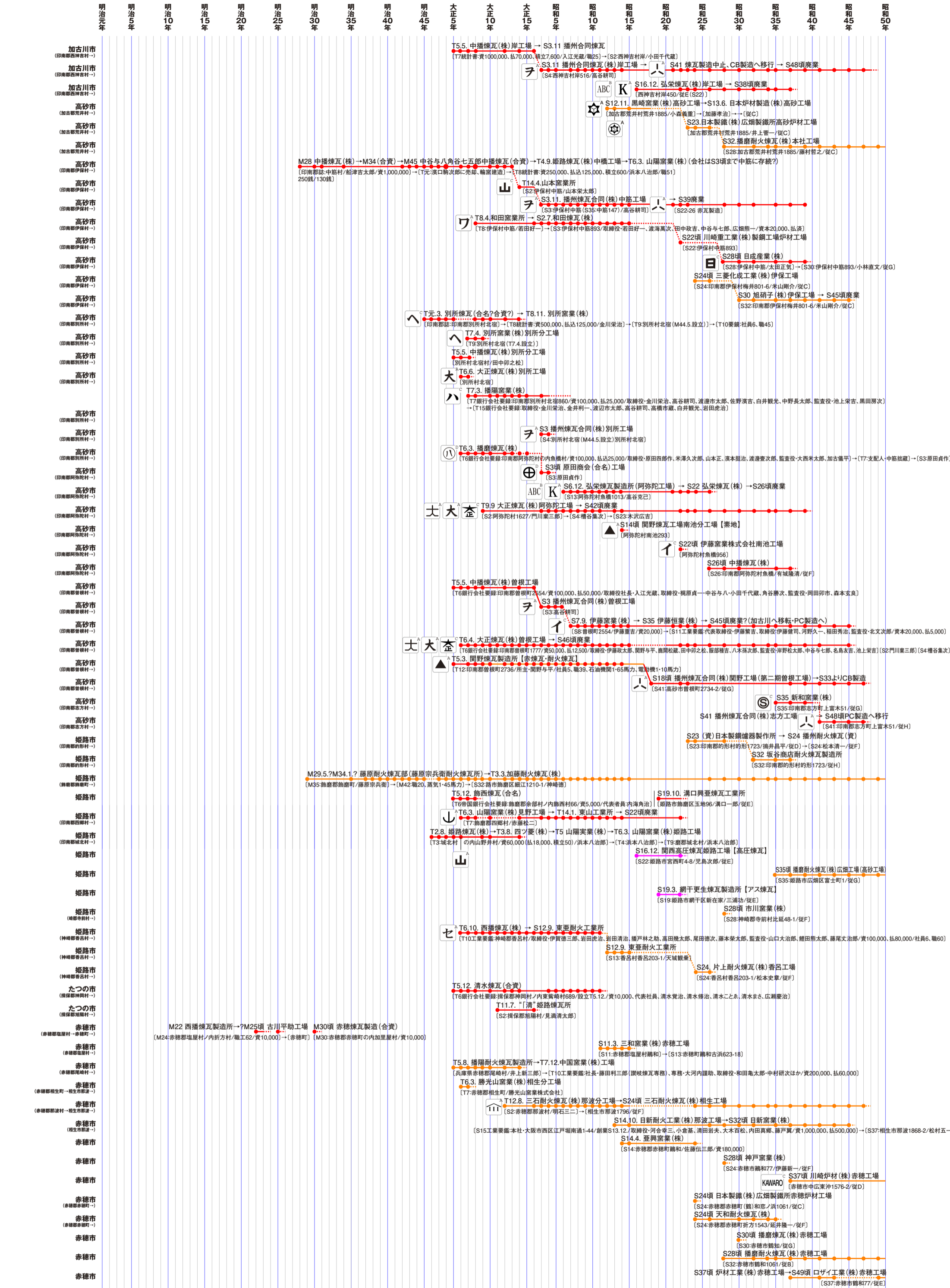
明治元年 明治5年 明治10年 明治15年 明治20年 明治25年 明治30年 明治35年 明治40年 明治45年 大正5年 大正10年 大正15年 昭和5年 昭和10年 昭和15年 昭和20年 昭和25年 昭和30年 昭和35年 昭和40年 昭和45年 昭和50年



大阪府下煉瓦工場の消長(4)

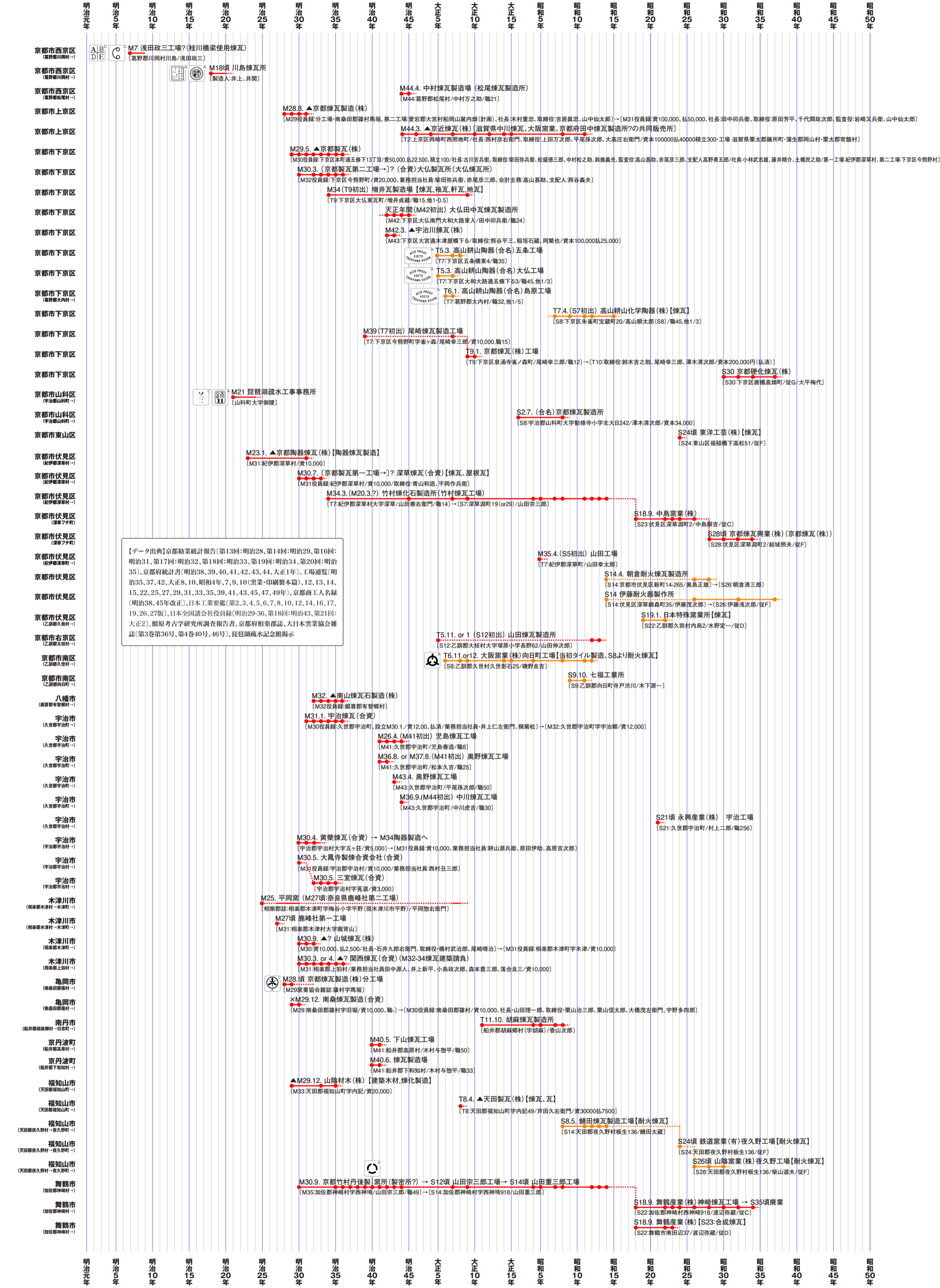






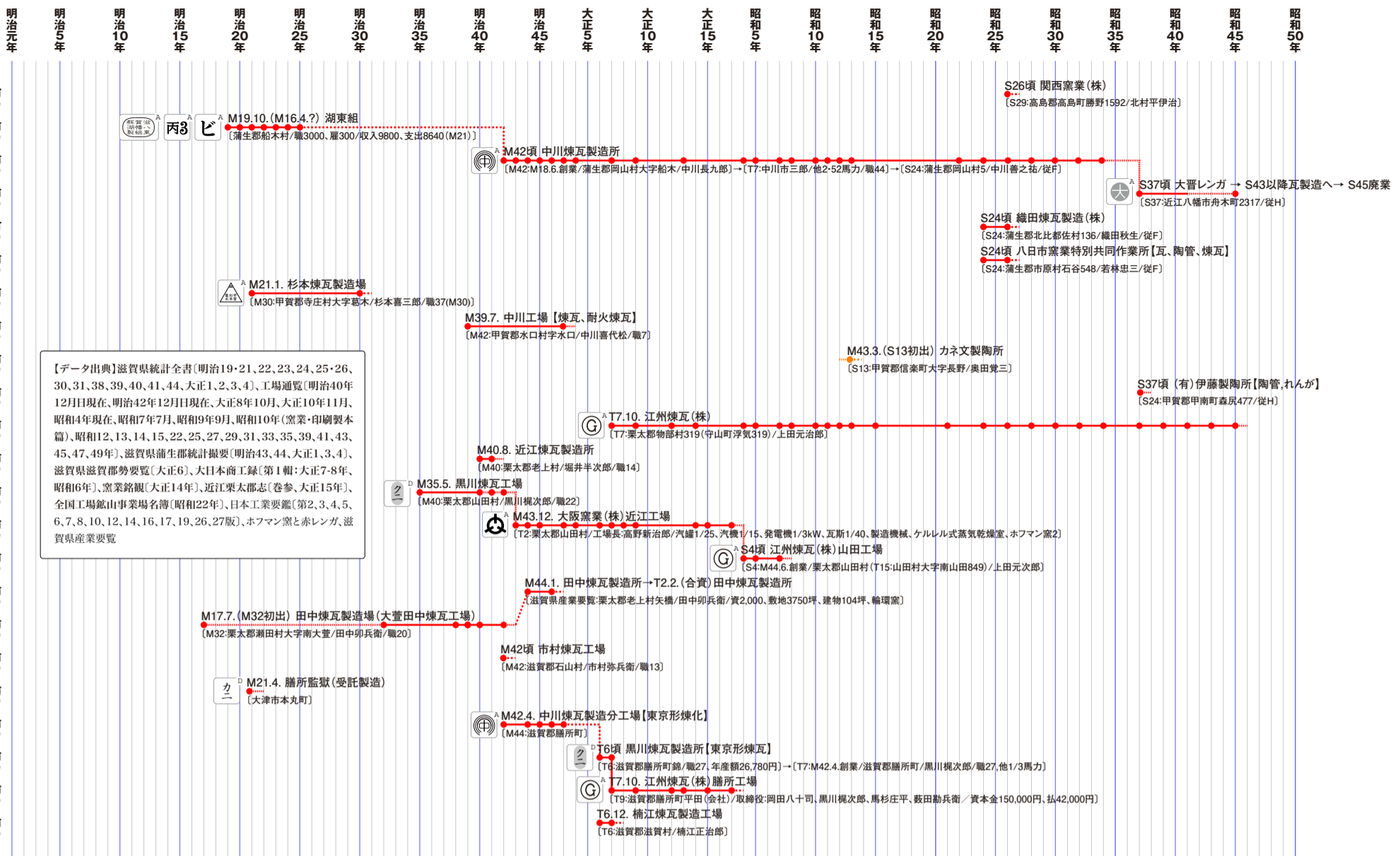
兵庫県下煉瓦工場の消長(2)



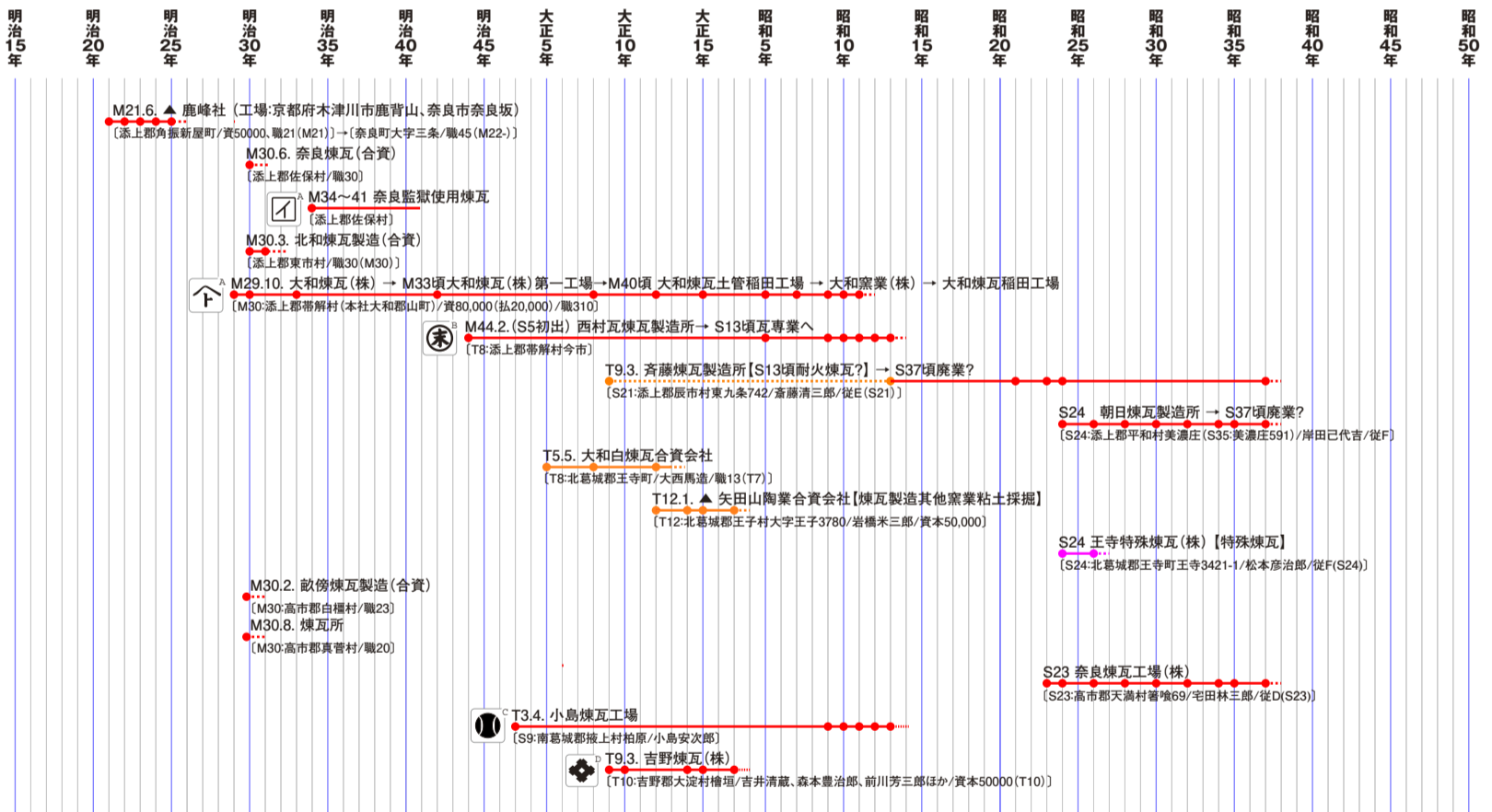


【データ出典】京都勸業統計報告(第13回:明治28,第14回:明治29,第16回:明治31,第17回:明治32,第18回:明治33,第19回:明治34,第20回:明治35)、京都府統計書(明治38,39,40,41,42,43,44,大正1年)、工場通覧(明治35,37,42,大正8,10,昭和4年,7,9,10(窯業・印刷製本編)、12,13,14,15,22,25,27,29,31,33,35,39,41,43,45,47,49年)、京都商工人名録(明治38,45年改正)、日本工業要鑑(第2,3,4,5,6,7,8,10,12,14,16,17,19,26,27版)、日本全国諸会社役員録(明治29-36,第18回:明治43,第21回:大正2)、榎原考古学研究所調査報告書、京都府相楽郡誌、大日本窯業協会雑誌(第3巻第36号、第4巻40号,46号)、琵琶湖疏水記念館揭示

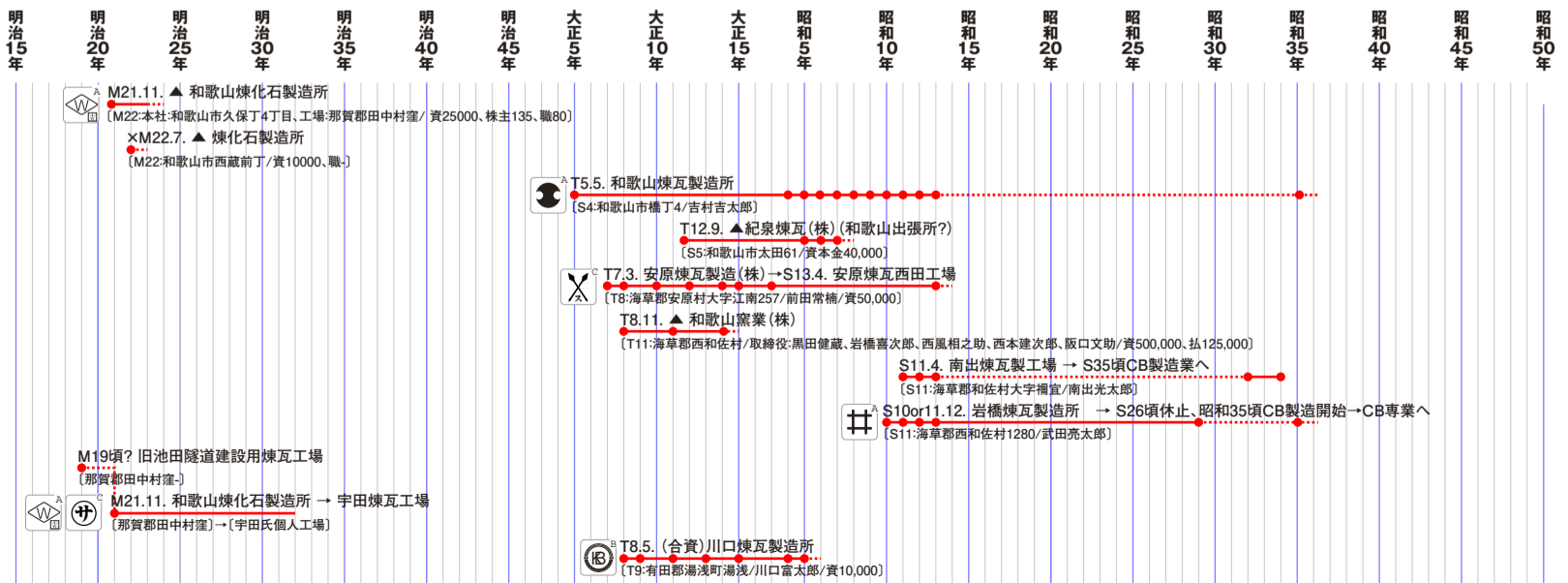
### 京都府下煉瓦工場の消長



### 滋賀県下煉瓦工場の消長



### 奈良県下煉瓦工場の消長



### 和歌山県下煉瓦工場の消長